

留学生と居場所

～国際寮が担うコミュニティ形成の在り方～

塩原良和研究会

12期 佐藤美紗希・藤岡陽大・渡辺春乃

13期 岡井天海・神谷莉乃・佐藤凧沙・内藤颯乃佳

目次

序論		3
第1節：研究背景・動機	12期 藤岡陽大	
第2節：調査概要	12期 佐藤美紗希・13期 神谷莉乃	
第3節：問い		
第1章 「居場所」についての検討	12期 藤岡陽大	7
第1節：「居場所」の誕生		
第2節：「居場所」を構築する人間関係		
第3節：人間関係と場所の相互扶助		
第4節：外国人の居場所をめぐる考察		
第2章 日本における留学生の受け入れ体制	13期 内藤颯乃佳	11
第1節：日本へ留学する学生の現状		
第2節：国の留学生受け入れ体制		
第3節：民間での留学生受け入れ		
第3章 空間性・場所性についての検討		
第1節：日吉国際学生寮	13期 岡井天海	16
①日吉国際学生寮の居住空間		
②寮生間のつながりを促す空間		
第2節：綱島 SST 国際学生寮	13期 佐藤凧沙	25
①綱島 SST 国際学生寮の居住空間		
②寮生間のつながりを促す空間		
第4章 留学生を取り巻く関係性	12期 佐藤美紗希	31
第1節：寮長と留学生		
第2節：レジデントアシスタントと留学生		
第3節：日本人学生と留学生		
第4節：留学生と留学生		
第5章 留学生とコロナ禍	12期 渡辺春乃	36
第1節：エスニック・マイノリティの居場所としての国際寮		
第2節：自己存在感を与える場としての国際寮		

第6章 留学生からみた「居場所」としての国際寮	13期 神谷莉乃	40
第1節：留学生について		
第2節：居住「場所」としての国際寮		
第3節：「人間関係」をつくる場としての国際寮		
第4節：「居場所」としての国際寮		
結論・謝辞		45

序論

12期 藤岡陽大

第1節：研究背景・動機

筆者らが所属する慶應義塾大学では70以上の国から派遣された交換留学生在が学んでおり、慶應ともだちプログラムなど留学生と日本人学生を繋ぐ取り組みも盛んに実施されている。しかし筆者らは学生生活の中で、「日本人と接点を持つ機会がない」「なかなか友達が増えずに困っている」といった留学生たちの不満を耳にしてきた。このような孤独感を抱えたままでは偶発性を伴う新しい人々との出会いが生まれず、充実感を得られないまま留学生生活を終えることになる可能性が高い。留学生らの疎外感や孤独といった問題は本校のみならず、日本全体の問題として広く存在していると予想する。さらに2020年4月以降では、新型コロナウイルス感染拡大防止という大義の中で海外での学びを支える自由な活動と人権の不可侵性は大きく揺らいでしまった(美馬2020:164)。外出の機会が奪われた分、留学生が人と交流できる場はより少なくなり、孤立した状況が悪化したと予想できる。

そこで筆者らは、留学生の居場所として本校の二つの国際寮を対象とし、「国際寮が果たす居場所としての役割」についての調査を実施した。人と人が居合わせる「居場所」を通して人が支え合う仕組みを構想していくことは、近年私たちが直面する広範な社会課題を解決するための出発点として重要視されている。「孤独」や「分かり合えなさ」が引き起こす問題は多く、一人一人が他者との対等な関係性を通して自らの価値を多角的に捉え直すことのできる空間を確保していくことの必要性が高まっているからだ(片山2015:6-9)。また筆者らはゼミ活動を通じて「居場所づくり」を行っており、居場所の存在が安堵感や好奇心を人の心に生み出すことを肌感覚で理解していたことも、本テーマに着目する動機であった。

また国際寮は居場所になり得る上で興味深い特質を持っていると考える。吉原は、『住まうこと』に伴って、地位とか身分などを超えて生じる、生活上の争点に共通に向き合う。共同性は必ずしも『土地の共同』に回収されず、異なる者同士の相互性・非同一性にもとづくものである(吉原2019:49-50)」と指摘している。人と人がお互いの異なる点を擦り合わせることによって共同性は育まれるのだ。そして国際寮では、年齢や出身国など様々な要素が交錯し、共有空間の中で互いに無理のない生活を送るために異なる主張を交換し合う必要がある。つまり国際寮は他人同士がお互いの存在を認め合い、居場所を築いていくことに適した場所であるはずだ。そのため、筆者らは国際寮が居場所として留学生の生活にもたらす影響や課題点についての分析を実施することとした。

最後に、空間が「居場所」として機能しているかは、その空間を利用する当人の言葉からしか知り得ない(「居場所」が人の心にもたらす効用は第一章で後述する)。そのため本報告

書では、国際寮に関わる様々な人へのインタビューで得られた証言を第一に、国際寮の「居場所」的機能についての考察を進めていくこととする。

第2節：調査概要（12期 佐藤美紗希・13期 神谷莉乃）

上記のような背景を踏まえて、本共同研究では慶應義塾大学に留学生として在籍する学生が暮らす二つの国際寮関係者へのインタビュー調査を基に、国際寮は留学生の「居場所」として機能しているのか、またそこには「居場所」になる上でどのような課題が存在しているかについての考察を行った。以下にインタビューの概要を記す。

【インタビュー1：国際寮の寮長夫妻及びレジデント・アシスタント】

1. 概要：日吉国際学生寮及び綱島 SST 国際学生寮それぞれの寮長夫妻とレジデント・アシスタントを対象として、留学生の日本における居場所としての国際寮の機能に関するインタビュー調査を実施した。日吉国際学生寮のインタビューは、当該学生寮内の会議室にて寮長夫妻とレジデント・アシスタント両名に対して同時に行った。一方、綱島 SST 国際学生寮のインタビューは、当該学生寮2階のキッチンレジデント・アシスタント、慶應義塾大学三田キャンパスの教室にてレジデント・アシスタントにそれぞれ別に行った。インタビュー内容はその場でのメモ及び録音機材の使用により記録し、その内容を報告書に記載することについて対象者の了解を得ている。
2. 選定理由と質問：寮長夫妻とレジデント・アシスタントをインタビュー対象として選定したのは、彼らが国際寮の円滑な人間関係の構築と設備等の環境形成の双方に強い影響力を持つ存在であり、国際寮が居場所として機能していく上で重要な役割を担っていると考えたためだ。そこで、国際寮において彼らは留学生とどのような関係性を築いているのか、あるいは国際寮に暮らす留学生がどのようにして自らの居場所としてのコミュニティを形成しているのかについて質問を投げかけた。
3. 各インタビュー対象者の国際寮での業務内容
 - A. 寮長ご夫妻：寮長の仕事は、1組の夫婦によって住み込みで行われるのが基本である。寮長は主にエントランス近くの管理人室に控え、寮生の郵便物の管理や来訪者の対応などを行っている。寮の割り振りは管理会社によって行われるが、必ずしも国際寮の寮長が英語に堪能であるというわけではなく、多少の英語力と意欲があれば国際寮の担当になり得るという。なお、今回調査を行った二か所の寮は自炊式だが、日本の多くの学生寮は食事付きであり、その場合は寮母が食事提供の統括を担当することになる。
 - ① 日吉国際学生寮寮長ご夫妻：A さんご夫妻は日吉国際学生寮の設立と同時に

寮長に着任し、2021年11月現在、5年目を迎えている。それ以前は日吉国際学生寮の前身である日吉インターナショナルハウスを担当しており、合わせて20年ほど寮長の仕事をしている。

- ② 綱島 SST 国際学生寮寮長：B さんご夫妻は綱島 SST 国際学生寮の設立と同時に寮長に着任し、2021年11月現在、4年目を迎えている。それ以前にも3か所の学生寮で寮長の仕事をしてきた。二人とも海外経験はあるものの、英語がとりわけ得意なわけではないという。

B. レジデント・アシスタント：慶應義塾大学では、「レジデント・アシスタント (RA)」と呼ばれる学生スタッフが留学生と一緒に寮に住み込み、日々の生活の支援を行っている。主な活動内容は、留学生の入退寮支援、ウェルカムパーティーをはじめとした寮内の交流企画の立案・実施、寮内における通訳・翻訳支援などである。これらの他にも、留学生の行政手続きや口座開設など、寮外における生活の支援も自主的に行っているレジデント・アシスタントも存在するようだ。日吉国際学生寮・綱島 SST 国際学生寮共に、男女2名ずつ・計4名のレジデント・アシスタントが活動中である。

- ① 日吉国際学生寮 RA：C さんは大学入学と同時に日吉国際学生寮に入寮し、4年生になった現在に至るまで生活を続けている。入寮当初は特に国際交流を求めていたわけではなかったようだ。自身の内向的な性格から、一年生の時は寮の中でも自室にこもりがちであり、イベントにもあまり参加していなかった。自らのこのような状況に対し、「せっかく留学生がいるのにもったいない」と感じ、交流の輪を広げようと2年生の時からRAの仕事始めたのだそうだ。
- ② 綱島 SST 国際学生寮 RA：D さんは、大学入学と同時に綱島 SST 国際学生寮に入寮し、4年生になった現在に至るまで生活を続けている。この寮は2018年度に設立されたためDさんは1期生であり、1年生の2月にRAに着任して現在3年目を迎えている。地方出身者で一人暮らしには不安があったこと、外国人とのコミュニケーションに興味があったことから国際寮への入寮を希望した。海外経験はほとんどないそうだ。

【インタビュー2：国際寮での暮らしを経験した留学生】

1. 概要：慶應義塾大学に在籍し、綱島 SST 国際学生寮での生活を終えた留学生を対象とした。インタビュー調査は、個別で Zoom アプリを通じてオンラインで行った。対象となる留学生とは、RA さんを介して連絡して繋いでもらった。日本語が堪能な留学生が少ないことから、RA さんにもインタビュー調査の場に同席してもらい翻訳をお願いした。初対面の私たちとでは信頼関係が築けていない分、RA さんが同席することによってことをより深いところ部分まで聞けるという目論見があった。以下に留学生について

ての詳細を記載する。

【Gさん】

滞在時期・期間：2019年秋学期から2020年春学期

母校の所在国：スイス

2. 目的と質問：インタビュー調査を選んだ理由としては、留学生本人が留学生活や国際寮について感じたことを当事者の視点から会話を通じて得ることができるということが挙げられる。調査では、主に留学生活について、留学中のコミュニティについて、国際寮での生活や交流について取り上げ、エピソードを交えながら自由に話してもらうような形式で行う。

第3節：問い

本共同報告書では国際寮が留学生にとっての「居場所」として彼らの生活をいかに支えているかについて、その現状と今後の課題点を示すことを目的とする。この点を解明するためにリサーチクエスション（以下、RQ）を設定した。RQ1：留学生にとっての「居場所」を作る上で工夫されていることは何か？RQ2：コロナ禍で「居場所」としてどのような変化があったか？RQ3：「居場所」になる上でどのような課題を残しているのか？

第一章では「居場所」という概念についての検討を行い、居場所づくりを調査する上で踏まえるべきその成立条件や効果を整理する。第二章～第三章ではRQ1について「場所」の視点からの調査を行っており、第二章では日本政府と民間レベルでの留学生受け入れ支援体制について、第三章では慶應義塾大学の二つの国際寮の空間性についてを考察した。第四章ではRQ1について「人間関係」の切り口から考察すべく、留学生を取り巻く人間関係の聞き取りを記録した。第五章ではコロナウイルス発生前と発生後で居場所としての国際寮がいかに変容したかについて調べた（RQ2）。第六章では留学生へのインタビューをもとに国際寮の居場所としての評価及びその課題の検討を行った（RQ3）。国際寮という広範な人々を包摂する特殊な居住空間への着目は、今後より広い幅を持って社会に立ち上がっていくべき「居場所」の可能性と乗り越えるべき課題を示唆してくれると期待している。

引用・参考文献

片山善博，2015「問題提議 序にかえて」『総合人間学』第9号、2015年、4-8頁

美馬達哉，2020『感染症社会 アフターコロナの生政治』人文書院

吉原直樹，2019『コミュニティと都市の未来』ちくま新書

第1章 「居場所」についての検討

12期 藤岡陽大

はじめに

人と人が支え合う仕組みの出発点として注目される「居場所」とは一体どんな空間なのだろうか。本章では「居場所」が注目され始めた社会的な背景や定義に関する先行研究と共に、その成立条件や期待されている効果について明らかにしていく。

第1節：「居場所」の誕生

1980年代中頃から学校にいかない・いけない不登校の生徒が増加したことをきっかけに、マスコミの間で「居場所」という言葉が使用され始めた。登校拒否が社会現象として語られ始めたことで、いかに若者が安心して過ごすことができる居場所を社会に確保することができるかといった議論が熱を帯びてきたのである。そのため当時は、居場所と言えば不登校の学生を受け入れるフリースペースを示す言葉として主に使用されていた。しかし2010年代に入り、「居場所」は様々な世代や社会的弱者を包摂する空間として時代のキーワードとなっていく（萩原 2018：19-20）。高齢者・在日外国人・障害者・LGBTQ などマイノリティとして括られてしまう傾向を持つ人々が日々感じる生きずらさを共有する場として、また多様な価値観との出会いによって癒しを受ける場として居場所は機能していったのである。

ただ居場所は上記の社会的なカテゴリーに当てはまる人のためにあるのではなく、あらゆる人が居場所を必要とする存在であると萩原は解説している。「自分の場所が失われていく」という感覚は誰もが経験する感覚であり、特に社会的な出来事をきっかけに居場所への喪失感を抱く人々が多い（萩原 2018：115-117）。例えば、90年代半ばにおける阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、若者の相次ぐ自殺を通して居場所の喪失を経験した者は多い。さらに、現代のコロナ禍での隔離生活はあらためて人と人のつながりの大切さを思い起こさせる契機となった。このように居場所は不登校の若者に対する支援をベースに生まれてきた言葉であったものの、包摂可能な人々の対象が拡大したことからその役割もより一般化してきたのだと考えることができる。

第2節：「居場所」を構築する人間関係

上記の通り「居場所」という言葉は時代に合わせて使用の在り方が変わり、その定義は定められておらず変動的である。しかし一般的に「居場所」は、「『ここは私の場所だ』『私はここに居てもいいんだ』という安心感をもてる場所のこと」（藤谷 2015：77）と捉えられている。そこは人が心の底から自分が存在してよい場所として認識できる空間であり、その確信は他者から自分がそこにいてもよいと承認されていることを前提に存在している。つま

り「そこに自分がいることが当然であり、周りもそう認めている場所」(藤谷 2015:76-77)と表されるよに、自己と他者から双方向的な承認が必要とされることが分かる。

他者からの承認が必要とされるとすると、居場所においても同調圧力による「生きづらさ」の再生産がされることが危惧される。その場における周囲の人々からの期待に寄り添うことのできない行動を取った場合、人は他者からの承認を受けにくい。藤谷もこれを「場の倫理」の問題として議論しており、「居場所は、たとえ当人の努力で他者との関係を再構築することを通して獲得することができるとしても、どこまでも他者からの受容・承認という受動性を帯びている」(藤谷 2015:80)と説明している。このような同調圧力は戦後日本が強い傾向として持つものであり、居場所が「生きづらさ」から回復する場であるとすればこの性質を回避する必要がある。

しかし自分が他者からの承認を受けなければならないことと同じように、他者もまた自分からの承認を受けなければならない。居場所とは他者にとっても安心して過ごせる場であり、人同士の相互関係によってつくられていくものだからだ。ロシアの思想家であるミハエル・バフチンは社会的な関係性において人間の可変性を認識することの重要性を説いている。人は常に変わり続ける存在であるため、他者を理解することは不可能である。一方で人は関係性の中でお互いに影響を与え合うことが可能であり、自分も他者もお互いをきっかけに変わり続けていく生き物であると認識することで対等で尊厳を持った対話的な関係性が育まれていくのだ(桑野 2021:37-49)。萩原もまた「居場所は他者・事柄・物からの一方的規定によって喪失していく。それは世界の中での『自分』という位置、人生の方向性、存在感の動じ喪失を意味している」(萩原 2018:111)と偏りのある関係性を批判している。居場所での人間関係を通して自分の「位置感覚」を獲得することが出来れば、他者や事柄、物に対して好奇心を持って接していくゆとりが生まれる。これは留学中の学習達成度や異文化理解の促進という成長至上主義的な留学の目的とも喧嘩することのない居場所ならではの効用であるだろう。互いを対等で可変的な存在として影響し合う心持を保つことが、居場所の力を最大限発揮させる上で大切なのである。

第3節：人間関係と場所の相互扶助

居場所についての考察を行う上では「人間関係」だけでなく、「場所」についての洞察も深めることが必要だ。上記のような対等な人間関係が育まれる人材があったとしても、その空間を安全に保つ施設や制度が整っていなければ居場所は成り立たないからである。また現代では人間関係の失敗について自己責任論で語られる傾向が強い。関係性が上手くいかない理由は個人の性格に欠陥があるからであると断言されてしまう。ここに「場所」についての考察を入り込ませ、人間関係の失敗を社会的責任としても捉えることは多くの関係性を再構築することの希望となるのではないだろうか。このような疑問から、本報告書では留学生の受け入れ体制(日本政府の方針・民間レベルの支援)、国際寮の制度やルール、また建築的な観点からも「場所」について考察を重ね、「居場所」がつけられる上で必要な土台

がいかにか整えられているか考える（第二章、第三章）。

また「場所」と「人間関係」に着目する上で、サードプレイスという概念について語るとは避けて通れない。サードプレイスとは、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」（Oldenburg 1989=2013:59）として定義された概念であり、ファーストプレイスの家庭やセカンドプレイスの職場とは異なり、他人同士が互いの信頼性と互酬性を基礎としての繋がりがあうとされる（石山 2021:4）。このようにサードプレイスは「自己と他者の双方向的な承認」を基礎としている点で「居場所」の特徴と重なり合うのだ。また太田は居場所では、「日常生活における人間関係の煩わしさ、社会的圧力・監視・権力の介入などから回避することによりアイデンティティを確認することができる」（太田 2015:61-63）と主張し、居場所の避難所としての側面も強調している。つまりこの二つの概念は、固定的な人間関係や価値基準から逃れることのできる場所である点においても類似しているのだ。

サードプレイスに関する議論を踏まえることは、国際寮の居場所としての特異性を浮かび上がらせてくれる。なぜならそこは、サードプレイスである以前に「自宅」というファーストプレイスとしての機能を確立させる必要のある空間であるからだ。国際寮は留学生の居住生活をプライバシー性を保ちながら確保しつつ、見ず知らずの他者と信頼関係を育む第三の場として機能することを目指すのである。この極めて難しく、特異的な場所を築くために寮長やレジデント・アシスタントを始めとした人々の試行錯誤は欠かせない。彼らや留学生の言葉を考察することは、国際寮がサードプレイスの範疇を超えた居場所として機能する上での課題を、「居場所」という概念が持つ可能性の広がりと共に教えてくれるだろう。

第4節：外国人の居場所をめぐる考察

最後に、外国人である留学生にとって国際寮が居場所となる上での追記的な条件を考える。エスニック・マイノリティの子供や若者の居場所についての研究を行う矢野恵によれば、以下の条件を保持することが必要であるという。①マジョリティである日本人が主流ではない場に身を置き、日本語ができなくとも自尊感情が保持できること。②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること。③安心して母語で自己表現して過ごせること。④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること。⑤日本人ではないことの不利をのりこえて将来を開くポジションを得られること。⑥多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場であること（矢野 2007:171）。矢野は本報告書での対象者よりも若い年齢の層を想定しているため、より強度な支援を必要とした居場所の条件であると考えられる。しかし②や④に書かれている内容は居場所形成における基本的な姿勢であり、⑥にある「多文化を利する」といった内容は国際寮が多文化性を活かした居場所づくりを行う上で大切にしなければならない条件なのだろう。

おわりに

以上の議論を踏まえて、「居場所」は場面に合わせてその定義を変化させるものの、「人と人が互いの可変性や相違点を認め関わり合い、安心して過ごすことができる空間」であることが分かった。また居場所は「人間関係」と「場所」の両面から考察することが不可欠であり、「場所」が居場所の在り方の幅を膨らませていく要素であることを踏まえてこの先の議論を進める。第二章では、まず「場所」の中の制度的な側面に着目し、国家や民間によっていかに留学生の居場所を確保できているか考える。

引用・参考文献

石山恒貴, 2021「サードプレイス概念の拡張の検討：サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題」『日本労働研究雑誌』第63号、2021年、4-17頁

太田明, 2015「<居場所がない>ということ 承認をめぐる闘争と病」『総合人間学』第9号、2015年、60-74頁

桑野隆, 2021『生きることとしてのダイアログ バフチン対話思想のエッセンス』岩波書店

萩原建次郎, 2018『居場所 生の回復と充溢のトポス』春風社

藤谷秀, 2015「<居場所>と社会で生きる権利」『総合人間学』第9号、2015年、75-83頁

矢野泉, 2007「エスニック・マイノリティの子供・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学』第9号、2007年、169-177頁

Oldenburg, R. (1989) *The Great Good Place: Cafés, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Da Capo Press. (忠平美幸 訳, 2013『サードプレイスーコミュニティの核となる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房)

第2章 日本における留学生の受け入れ体制

13期 内藤颯乃佳

はじめに

本章では、第2章以降で「留学生と居場所 ～国際寮が担うコミュニティ形成の在り方～」というテーマのもと行われた研究について記すうえで前提となる、日本における留学制度や留学生の現状について記述する。

日本への留学生は、国費留学生、外国政府派遣留学生、私費留学生の3種類に分類される。国費留学生は大使館推薦（研究留学生、日本語・日本文化研修留学生、高等専門留学生のみ大学推薦も適用される）を獲得した学生で、日本政府の奨学金によって学びと生活の支援を受けながら日本に留学することができる。これに対し、外国政府派遣留学生は派遣国の奨学金による留学生であり、国同士の協力関係によって成立している制度である。そして、多くの留学生が分類されるものが私費留学生であるが、経済面で障壁が多く、奨学金制度や各種サポート体制の拡充が求められている。今回の共同研究報告書ではこの私費留学生について扱う。

本章は三つの節で構成されている。第1節では、近年の日本への留学生の現状をコロナ以前とコロナ禍に分けて述べる。次に、第2節では、留学生の「受け入れ」に焦点を当てた日本の制度を扱う。そして第3節では日本における民間レベルでの留学生受け入れ体制を扱う。

第1節：日本へ留学する学生の現状

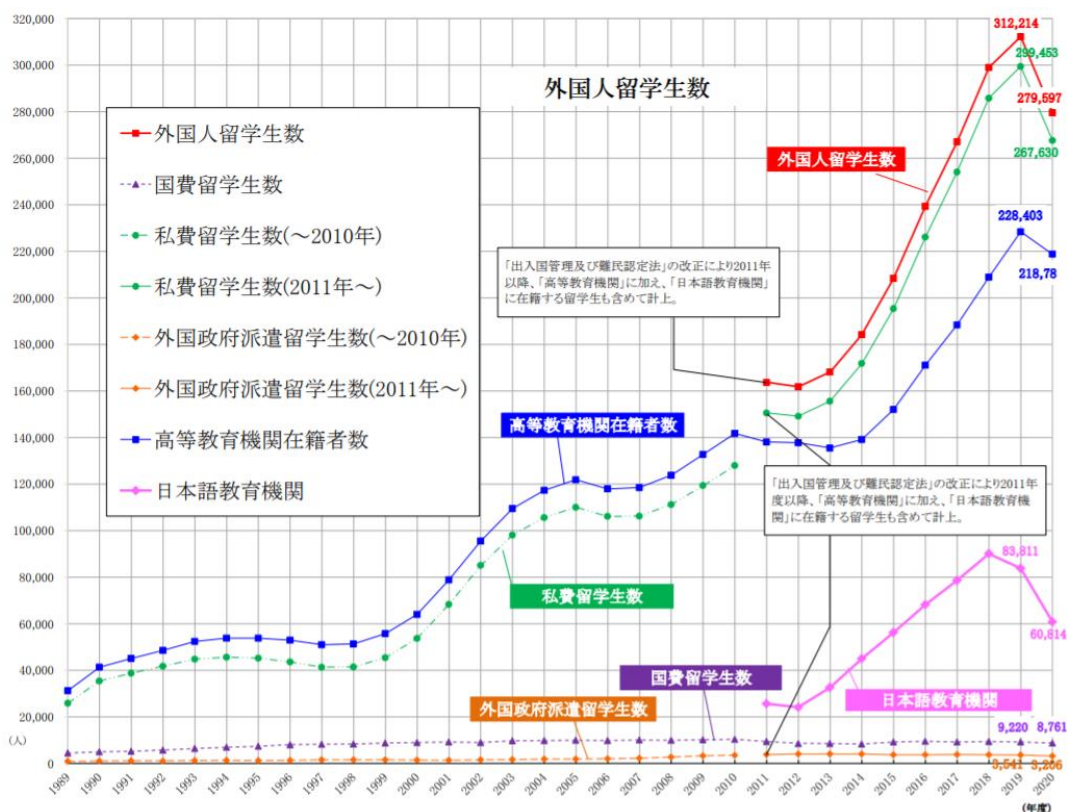
日本政府による「留学生30万人計画」が軸となり、日本へ留学する学生は2000年代以降急激に増加してきた。しかし、2020年に新型コロナウイルス感染症の影響により他国への移動が厳しい制限を受けることとなったため、近年の推移を「現状」として一括りに扱うことはできない。そのため、第1節では新型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前と現在を分け、日本にいる留学生に関する統計データを中心に確認する。

まず、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前の留学生について、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の2019年度外国人留学生在籍状況調査結果（JASSO 2020：1-5）によると、2019年5月1日時点で留学生数は312,214人である。「出入国管理及び難民認定法」が改正され、「高等教育機関」に加えて「日本語教育機関」に在籍する留学生も計上されるようになった2011年以降、留学生は増加の一途をたどっており、2019年も前年比13,234人（4.4%）増という結果になった。在学段階別では大学（学部）が89,602人と最も多く、二番目に83,811人の日本語教育機関、三番目には専修学校（専門課程）が78,844人で続いている。出身地域別ではアジア地域からの留学生が構成比93.6%を占め、出身国別では中国が構成比39.9%、続くベトナムが23.5%を占めており、欧米からの留学

生は5%にも満たないことが分かる。今回の共同研究でインタビュー調査を行った国際寮を所管する慶應義塾大学についても、慶應義塾大学国際センター（慶應義塾大学国際センター 2021）によると現在在学中の留学生のうち53.3%が中国、22.9%が韓国からの留学生であり、インタビュー調査を行った日吉国際学生寮や綱島 SST 国際学生寮においても中国や韓国からの留学生が多く居住している。

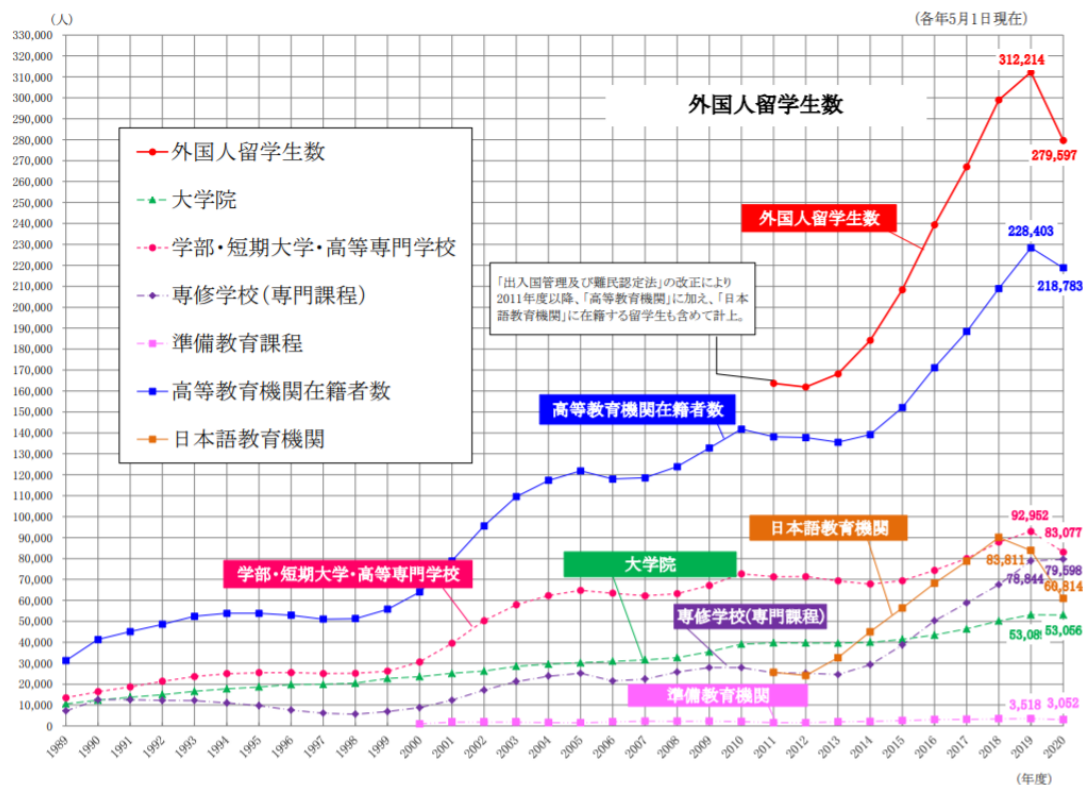
次に、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた2020年度外国人留学生在籍状況調査結果（JASSO 2021：1-2）におけるグラフを見ると、留学生数が急激に減少している（図表①）。国費留学生と外国政府派遣留学生数には大きな減少傾向は見られず、私費留学が大きな打撃を受けたことがうかがえる。また、在学段階別では専修学校（専門課程）と大学院において減少傾向が見られない点については、この二つの在学段階にいる留学生が日本での研究活動や就職を見据えており、新規留学生の入国が停止した後も既に日本に留学に来ている学生が留まっていた可能性も考えられる（図表②）。

図表①＜外国人留学生数の推移＞



出典： 独立法人日本学生支援機構（JASSO）.“2020（令和2）年度 外国人留学生在籍状況調査結果”.2021-3. p1
https://www.studyinJapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf

図表②＜在学段階別外国人留学生数の推移＞



出典： 独立法人日本学生支援機構（JASSO）.“2020（令和2）年度 外国人留学生在籍状況調査結果”.2021-3. p2
https://www.studyin-japan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf

JASSO の令和元年度私費外国人留学生生活実態調査（JASSO 2020：7）によると、留学の目的として最も多い「学位の取得（50.8%）」に続くのは「日本及び日本企業への就職（45.0%）」、三番目には「就職に必要な技能や知識の取得」が挙げられている。また、同調査結果（JASSO 2020：16）には留学生の経済状況についても記されており、支出の多くが生活費や学費によって占められており、収入源は74.5%がアルバイト、70.2%が仕送り、奨学金を受け取っている学生は41.2%であることから、留学生受け入れにおいて生活面のサポートも非常に重要であることが分かる。

第2節：国の留学生受け入れ体制

日本政府はグローバル戦略の一環として、2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指す「留学生30万人計画」（2008年～）を推進してきた。この計画では以下5つの方策が立ち上げられた（文科省 2008：1-3）。1つ目は日本の文化の発信や日本語教育の拡大による「日本留学の動機づけ」や「留学希望者のためのワンストップサービスの展開」を軸とした『留学生の誘い』、2つ目は『入試・入学・入国の入口の改善』による日本留学の円滑化、3つ目は英語のみでの単位取得が可能になるなどの『大学等のグローバル化推

進』、4つ目は「安心して勉学に専念できる環境への取組」としての『受入れ環境づくり』、そして5つ目は「社会のグローバル化」を目的とした『卒業・修了後の社会の受入れの推進』である。これらの方策により、結果として1年早い2019年に目標を達成することとなった。

しかし、第1節でも言及したように2020年に新型コロナウイルス感染症の影響で出入国が厳しく制限されたため日本への留学生が激減し、30万人を大きく下回った。その後約1年半が経ち、2021年11月に「新型コロナウイルス感染症に係る水際措置」が見直され、業務所管省庁への事前の申請を条件に大学等の留学生受け入れが許可されている（文科省 高等教育局学生・留学生課留学生交流室 2021：1）。また、文部科学省は日本での就業に繋がる傾向の強い専修学校に着目して「専修学校留学生の学びの支援推進事業」を立ち上げるなど、新型コロナウイルス感染症により機能が弱体化・停止した留学生の受け入れ体制を立て直すための施策を打ち出している（文科省 2021）。

また、文部科学省が所管する独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）は「奨学金事業」や留「学生支援事業」、「学生生活支援事業」などの学生支援を実施しており、留学予定の学生や留学中の学生だけでなく、日本での就職に関する情報提供や留学生コミュニティの紹介など、留学後のサポートまで手掛けている（JASSO “Study in Japan”：JASSO とは？）。具体的には、日本留学に関する情報提供、日本留学試験（EJU）、日本留学のための学資の支給と援助、留学生の宿舎にかかる支援、留学生交流推進事業、フォローアップ事業、日本留学海外拠点連携推進本部、日本語教育センターにおける日本語教育・進学予備教育といった取り組みがある（JASSO “Study in Japan”：日本学生支援機構（JASSO）の外国人留学生受入れ事業）。

加えて、留学生を受け入れる教育関係者や日本企業に向けた情報提供・発信も行うなど、留学生受け入れに関する様々な取り組みを実際に行っている。

第1節で述べたように、私費留学生の支出の多くは生活費や学費に占められており、留学後に直面する問題として「物価が高い」という点を挙げる留学生が多くいるという現状（JASSO 2019：14）をふまえると、生活面のサポート体制の確立が日本の留学生受け入れ体制の課題であると考えられる。とりわけ、文部科学省「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査」により2021年の緊急事態宣言発出期間にアルバイトの収入が減少した大学生は有効回答数の約5割、大きく減少した学生は約2割である（文科省 2021：8）ことから分かる通り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により日本全体としてアルバイトの雇用が縮小されており、収入を失う大学生は多い。語学や制度の面で日本人学生よりも不利な状況に立たされかねない留学生も包摂できる制度を、国だけでなく地域や大学との連携を図りながら整備していく必要がある。

第3節：民間での留学生受け入れ

留学生の受け入れは国単位の取り組みだけでは達成することができない。一般財団法人日本国際協力センター（JICE）などの民間組織が国や国所管の組織からの業務委託を受けて留学生の受け入れ事業に取り組んでいる（JICE 2021）。また、留学生が実際に日本で生活するうえで多くが国際学生寮や民間のアパート、マンションに居住しており、それらの受け入れ体制の整備も必要不可欠である。

このような民間の留学生受け入れ体制において、とりわけ後者については現在も多くの課題が存在する。慶應義塾大学3年次在学中の韓国人留学生にインタビュー調査を行ったところ、民間のアパートやマンションに居住する場合の契約手続きに関して障壁が多くあったという回答を得た。中でも言語に関する障壁が最も多く、今後国が新型コロナウイルス感染症で減少した留学生数を再び回復させるにあたり、大学や地域での留学生に対する個別的なサポートの拡充が必要である。

おわりに

日本の留学生受け入れ体制は、2008年に発表された「留学生30万人計画」をもとに様々な施策が実行され、2019年には目標年よりも1年早く30万人を達成した。しかし、2020年に新型コロナウイルス感染症の影響で新規留学生の受け入れが停止し、受け入れ体制の機能も弱体化していく。しかし、日本政府は2021年11月に水際措置の見直しを行い、留学生受け入れを段階的に進めていく方針を固めている。

このような状況において、日本で学び過ごす留学生は再び増加していくことが見込まれるが、生活面や金銭面での個別的なサポート体制は未だ不十分であり、留学生数の回復と同時に取り組むべき喫緊の課題である。これらの課題を解決するためには国の政策単位ではアプローチが難しく、留学生を受け入れる高等教育機関、留学生が居住する民間アパートやマンション、国際学生寮などの民間レベルの組織が連携しながら体制を整えていかなければならない。

また、JASSOの2020（令和2）年度外国人留学生在籍状況調査結果「9.留学生宿舍の状況」（JASSO 2021：9）によると、2020年5月1日時点で留学生数の83.3%が「民間宿舍・アパート」に居住し、今回の共同研究の調査対象である「学校が設置する留学生宿舍」に居住する留学生は12.6%である。今回の共同研究調査では、慶應義塾大学の国際寮に居住する留学生が、多くの留学生が選択する「民間宿舍・アパート」ではなく「学校が設置する留学生宿舍」を選択した要因や課題を分析することで、国際寮の居場所としての側面や留学生にとっての価値を検討し、国際寮が今後増加していくと推測される留学生の“居場所づくり”に与える価値を見出したい。

引用・参考文献

一般財団法人日本国際協力センター(JICE). “JICE とは”. 一般財団法人日本国際協力センター(JICE)ホームページ.2021.2022-1-31

<https://www.jice.org/about/index.html>

慶應義塾大学国際交流センター.”留学生数”.2021-5. 2022-1-31

<https://www.ic.keio.ac.jp/data/>

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) .“2020 (令和 2) 年度 外国人留学生在籍状況調査結果”.2021-3. 2022-1-31. https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) .“2019 (令和 1) 年度 外国人留学生在籍状況調査結果”.2020-4. 2022-1-31. https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2019z.pdf

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) .“令和元年度私費外国人留学生生活実態調査”. 2021-6. 2022-1-31. https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/06/seikatsu2019.pdf

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) .“JASSO とは?”. Study in Japan. 2022-1-31

<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/other/jasso/outline.html>

独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) .“日本学生支援機構 (JASSO) の外国人留学生受入れ事業”. Study in Japan. 2022-1-31

<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/other/jasso/supportprogram.html>

文部科学省,外務省,法務省,厚生労働省,経済産業省,国土交通省.“「留学生 30 万人計画」骨子”. 2008-7-29. 2022-1-31

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/hito/ryu/pdfs/30k_k.pdf

文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室.“大学等における私費外国人留学生の入国再開について”.2021-11-5. 2022-1-31

https://www.mext.go.jp/content/20211105-mxt_kouhou02-000018769_11.pdf

文部科学省.”専修学校留学生の学びの支援推進事業”.2021. 2022-1-31

https://www.mext.go.jp/content/20210518-mxt_syogai01-000015069_1.pdf

文部科学省.”新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について”.2021-5. 2022-1-31

https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

第3章 空間性・場所性についての検討

13期 岡井天海

はじめに

本章では、留学生の居場所としての学生寮について、実際に見学を行った日吉国際学生寮と綱島 SST 国際学生寮を例に、寮長夫妻とレジデント・アシスタントのインタビューを交えながら検討する。空間性・場所性という視点から、国際学生寮が「居場所」として存在するための工夫や課題を考察していく。

第1節 日吉国際学生寮

①日吉国際学生寮の居住空間

慶應義塾大学日吉国際学生寮は、「グローバルなトップリーダーを育む」ということをコンセプトに国内外の学生を受け入れている。そうして学生寮としての機能と国際交流の場としての機能を果たすために、さまざまな「コミュニケーション」を創出する工夫が施されている。

その工夫の一つとしては、寮室が国内生2名、留学生2名の4人1ユニットとなっていることがあげられる。ユニット式の国際学生寮は慶應義塾大学では初の導入であり、日々の生活の中でグローバルな交流を育むことを目的としている。現在はコロナウイルスの影響で、入居者の内訳が国内生80名、留学生10名になっているため、ユニット内の国内生と留学生の割合が異なっているが、本来は国内生と留学生が均等な人数になる。ユニット内は、4人で使うことが前提の共用部（図1）と個室（図2）で構成されている。共用部は、テレビが設置してあり学生同士で団らんができるスペースになっているリビング・ユニットシャワー・洗面所から成っている。共用部を抜けると、パーソナル空間を確保した個室があり、各個室には個別利用が可能な専用バルコニーもある。個室には遮音性の高い間仕切りと扉が採用されており、パブリックな共用部とプライベートな個室で、ユニット内に公私の線引きがひかれていることが分かる。このことから、ユニット内の寮生のことを気にせず、安心してプライベートな空間を過ごすことができるという印象を受けた。

また、ユニット内の共用部にはテレビが設置してあるが、個室にテレビを持ち込む寮生も多いということであった。レジデント・アシスタント自身、入寮当初の1年生の頃は自室にこもりがちであったことを後悔し、交流の輪を広げようと思ったことがRAになったきっかけだと語っている。つまり、日吉国際学生寮ではユニット式の国際学生寮ではあるものの、プライベートな空間は十分に確保されている。矢野泉の先行研究で述べられていたエスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所の条件としてあげられていた6つの中から、「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異

や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること。」(矢野 2007 : 171) を居場所形成における基本的姿勢の一つだと第 1 章で述べた。共用部のあるユニットは日々の生活空間の中でグローバルな交流を育める場所である。また、寮のルールとしてユニットには同ユニットのメンバーしか入れず部屋移動が禁止というものがあり、ユニットはパブリックな空間でありながら、プライベートな空間でもある。そして、十分に確保された真の意味でのプライベートな空間である個室がある。このことから、日吉国際学生寮で導入されているユニット式のシステムは、まさに過度に親密な距離感を柔軟に楽しめるという条件を満たしていると考えられる。

さらに、寮長寮母夫妻は「安心・安全・快適」が第一であり、その次にコミュニケーションを大切にしていると語っていた。自らの日常業務として一番重要なことは、快適な居住空間を寮生に提供し、寮生にとって生活しやすい環境を作ることであり、そのためには留学生に対しても、日本のライフスタイルに合わせた寮内のルールを半分強制、半分自主的に遵守してもらうことが必要だと考えていた。居住空間を提供するだけでなく、寮生の体調が悪くなると病院まで送迎するなどの生活面でのサポートをすることもあった。また、RA も留学生にとって容易ではない、日本の行政手続きや医療機関の受診の方法等をレクチャーするオリエンテーションを留学生の入寮時には行っているため、留学生が日本で生活するサポート体制は充分にとられている。第 1 章において、居場所における基本的な姿勢として、矢野泉の先行研究で述べられていたエスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所の条件としてあげられていた 6 つの中から、先ほど説明した②と「④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること。」(矢野 2007 : 171) が必要だと述べた。日吉国際学生寮では、住み込みの寮長夫妻と RA が留学生に対し、様々な生活面でのサポートをしているため、④も十分に満たしているといえる。

以上のことから、日吉国際学生寮が②と④の条件を満たしており、居場所形成における基本的な姿勢がとられている国際寮であることは分かった。さらに第 1 章において、矢野泉の先行研究で述べられていたエスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所の条件としてあげられていた 6 つの中で、「②や④に書かれている内容は居場所形成における基本的な姿勢であり、⑥にある『多文化を利する』といった内容は国際寮が多文化性を活かした居場所作りを行う上で大切にしなければいけない条件」としている。⑥の内容とは、「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場であること。」(矢野 2007 : 171) というものである。日吉国際学生寮ではこの条件を満たすことができているのだろうか。このことを考えるうえで、個室以外のユニット内については、管理会社によって週 5 回の清掃が行われていることに注目してみる。つまり、共用部においての清掃といった役割分担は存在しない。しかし、多文化性を活かすために寮生同士のコミュニケーションを創出する一つの手段として、何らかの役割があることは重要なのではないか。ここで、寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する、山川史の事例研究を取り上げ

る。寮生へのインタビュー調査によって、留学生と日本人学生の友人構築関係において影響を与えるものとして〔ルールの共有〕があげられており、その中でも一人一人に「役割分担」が決められていることが重要視されていた。(山川 2006 : 107) 山川が調査を行った国際寮では、留学生も日本人学生も関係なく、「寮生」としてそれぞれの学生が責任を持って仕事を行わなければならないシステムになっていた。これは「留学生」「日本人」といった枠を超え、「寮生」としてのアイデンティティの形成につながっていた。実際にある留学生がインタビューで「私たち寮生には寮を運営する責任があるし、『ミニ社会』に住んでいるような感じです。」と話し、山川は「私たち留学生も」という言い方をせず、「私たち寮生には」という言い方を留学生がしたこと注目し、この言い方から「寮生」としての認識が強く表れていると述べていた。(山川 2006 : 108) 一方、日吉国際学生寮の RA (レジデント・アシスタント) はインタビューで、「この寮ではあまり家事をしなくていいため、コミュニティの観点から見るとそれはマイナスに働くかもしれない。」と述べていた。清掃やゴミ出しといった家事に役割を決め、それを果たすことで生まれるコミュニケーションが日吉国際学生寮には存在しない。山川の研究から寮における「役割分担」のシステムが、留学生と日本人学生の友人構築関係を促進する一要因となっていることが明らかになったが、日吉国際学生寮にはそれがない。つまり、日吉国際学生寮のユニット制で、「役割分担」のシステムがないことは、寮生としてのアイデンティティを形成する一種の要因をなくしていると考えられる。そして、寮内で定められている日本での生活ルールを守るという〔ルールの共有〕はあるが、役割がないため、留学生が運営側に回ることはない。そのため、山川が調査を行った国際の留学生の言う『ミニ社会』(山川 2006 : 108) を日吉国際学生寮の留学生が感じることはあまりないように思われる。また、日吉国際学生寮では食事の提供があるわけではないため、Amazon のような通販サイトで自国の食品を取り寄せることができる。つまり、ある程度異国での生活を回避できるということである。寮では日本のルールが求められ、留学生が運営側に回らないため、留学生の自国の文化を寮に取り入れるといったこともない。これらのことから、ユニット制をとっていても、それだけでは「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場」として日吉国際学生寮はまだ不十分であると考えられる。



図1 日吉国際学生寮 ユニットの共用部



図2 日吉国際学生寮 ユニットの個室

②学生間のつながりを促す空間

居住空間のユニット制だけでは、「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場」として日吉国際学生寮が機能するにはまだ不十分であると述べたが、同様のことを寮長夫妻と RA も感じていた。しかし、日吉国際学生寮は、学生寮としての機能と国際交流の場としての機能を果たすために、さまざまな「コミュニケーション」を創出する工夫を施している。主に国際交流の場、そして「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場」として中庭（図3）と一体利用できる1階ラウンジ（図4）・集会室（図5）がある。また、中庭に面し明るく開放的な共用キッチンダイニング（図6）も各階にある。1Fラウンジや集会室は、学生の自主性に合わせ、多様なイベントが開かれる場になっており、先述した RA が行う手続き等をレクチャーするオリエンテーションも集会室で開催される。季節のイベントも開催され、2021年のクリスマスには中庭と集会室を一体利用して、スポーツとクイズを楽しむイベントを計画しているとのことだった。中庭に面し明るく開放的な共用キッチンダイニングは各フロアにあり、調理家電も備え付けてあるため、シェアキッチンを用いて、共同で料理を楽しむことができる。

このようなコミュニティを促す空間があるにも関わらず、共用スペースをどの程度利用するかは個人の裁量であるため、限られた生活空間の中では人種ごとにグループ化してしまうという課題があった。そこには言語の壁というものが存在し、それは寮長夫妻や RA のサポートで短期的に解決することも難しい。そこで、RA が主催となり共用キッチンダイニングを集会所として、言語をあまり必要としないボードゲームを行った。このことはコミュニケーションを創出するきっかけとなり、グループ間の垣根を越えた交流を育む上で一定の効果があったといえる。実際にこのゲームをきっかけとして生まれたコミュニケーションから仲が深まる留学生も多くいたとのことだった。しかし、ライフスタイルが異なることから、キッチンでの集會に参加できない留学生もおり、あくまでもライフスタイルの干渉を行うことはできないので、交流の輪に入ってもらえなかったということを RA は課題としていた。とはいっても国際交流を行うには、それを行うための場と主催者が必要である。そうした場所が充分にあり、主催する RA、そのサポートを行う寮長夫妻や寮生の存在が日吉国際学生寮にはあるため、国際寮が多文化性を活かした居場所作りを行う上で大切にしなければいけない条件である『多文化を利する』ことへの工夫がとられているといえる。

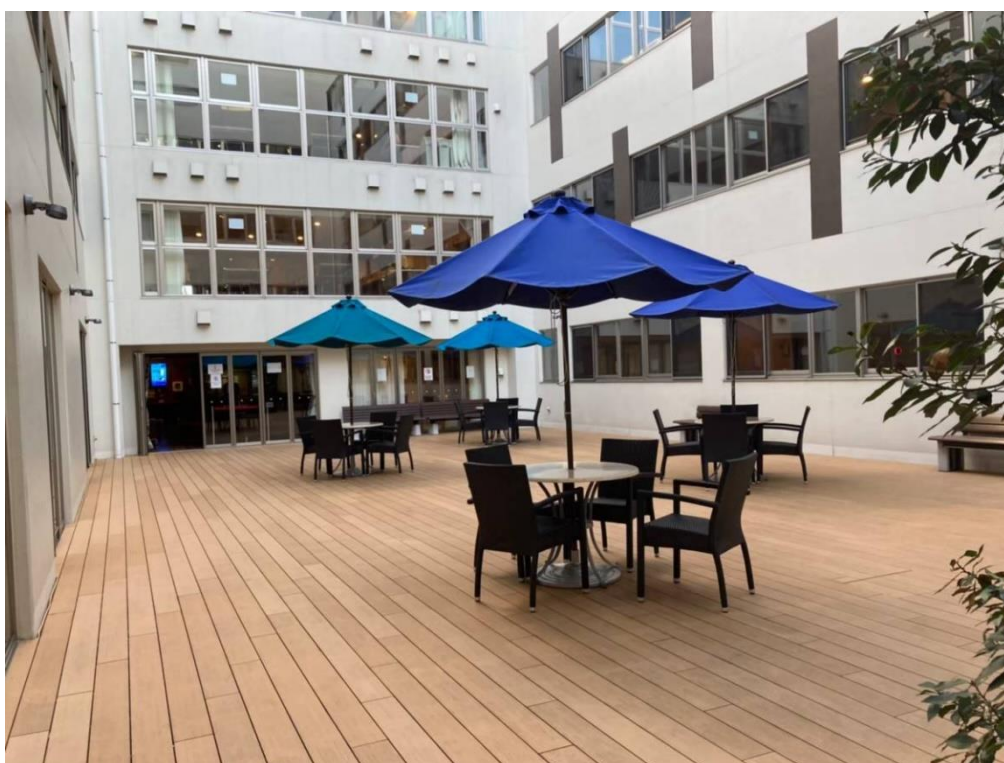


図3 日吉国際学生寮 中庭



図4 日吉国際学生寮 1階ラウンジ



図5 日吉国際学生寮 1階集会室



図6 日吉国際学生寮 共用キッチンダイニング

③おわりに

日吉国際学生寮では、交流を育むユニット制の寮室とパーソナル空間を確保した個室があり、生活面のサポートを行ってくれる RA と寮長寮母夫妻の存在からも居場所形成における基本的な姿勢を満たしていることが分かった。また、コミュニティを促す寮内の空間を利用し、イベントやゲームを行うことで「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場」として、機能するための工夫が施されていた。しかし、留学生に寮を運営する役割分担がないことから、コミュニティの参加はあくまでも自主的なものになっている。国際寮といった空間が多文化性を活かした居場所となるためには、それを行う空間があったとしても、日本とは異なる文化を持ち込む留学生の参加が必要不可欠である。しかし、RA や寮長夫妻にとって留学生の快適な暮らしのために、彼らのライフスタイルに干渉することができず、多文化交流を留学生に促すための干渉と交流の線引きが難しいことが課題であると考えられる。

引用・参考文献

矢野泉、2007「エスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I、教育科学』第 9 号、2007 年、169-177 頁

山川史、2013「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』第 30 号、2013 年、100-115 頁

第2節：綱島 SST 国際学生寮（13期 佐藤風沙）

①綱島 SST 国際学生寮の居住空間

綱島 SST 国際学生寮は、2018年に開寮した慶應義塾大学の国際寮である。その空間性・場所性について考察するため、現地見学や寮長夫妻とレジデント・アシスタント、留学生へのインタビューから得られた情報をもとに、まずは居住空間という側面から検討していく。

はじめに、綱島 SST 国際学生寮の体制について記述する。寮では寮長夫妻が住み込みで働いており、4名の日本人学生がレジデント・アシスタントを務めている。寮生の定員は163名となっており、日本人学生と留学生が半分ずつを占める。コロナ禍以前は毎年満員であったが、現在留学生は80名中15名にまで減ってしまっている。2020年初頭に帰国したきり日本に戻ってこれなくなり、そのまま退寮した留学生も多数存在する。留学生の滞在期間は半年から最長で1年となっており、2年目以降も日本に滞在する留学生はほとんどが一人暮らしを始める。留学生の入寮は毎年3月末と9月初頭、日本人の入寮は毎年3月30日で、4月3日にはレジデント・アシスタント主導でウェルカムパーティーが開催される。留学生が到着した際には、部屋まで案内したり、寮内をツアーして使い方をレクチャーしたりとオリエンテーションが行われ、寮則の説明や生活立ち上げの情報が伝えられる。留学生の出身国は欧米、東南アジア、韓国、中国が多いが、基本的に寮長夫妻やレジデント・アシスタントまたは日本語でコミュニケーションがとられる。

次に、綱島 SST 国際学生寮の施設や寮則について記述する。綱島 SST 国際学生寮は9階建てで、寮内はすべて一人部屋（図1）である。偶数階が女子のフロア、奇数階が男子のフロアとなっており、異性のフロアへの行き来は禁止されている。1フロア25部屋で、部屋は日本人学生と留学生が交互に配置されているが、寮生同士の部屋の行き来は可能である。コロナ禍の現在は留学生用の部屋に空きがある状態だが、そこに日本人学生を入寮させることはできない決まりとなっている。綱島 SST 国際学生寮では食事の提供がないため、各フロアには共用のミニキッチンが設置されている。2階にはたくさんの炊飯器や電子レンジ、オープン、ダイニングテーブル、テレビ、広いキッチンを備えた24時間開放のオープンキッチン（図2）があり、調味料や食器を入れておける全員分のロッカーやボードゲームも用意されている。オープンキッチンは白・黒・オレンジがかった赤を基調としたモダンな色合いで作られているが、道路側の大きな窓からは光が差し込んでおり、明るく開放感のある空間のように感じられた。9階にはテレビやソファ、ベンチ、ダイニングテーブルなどを備えたラウンジ（図3・図4）があり、ここでも飲食は許可されている。ラウンジは白・緑・木目を基調としたナチュラルな雰囲気、広く開放感のある空間である。原則23時までの利用となっているが、学習用途の場合のみ夜中や朝方まで開放されている。このように、綱島 SST 国際学生寮は、プライベート空間である一人部屋と、寮生と交流できる空間である共用スペースとから成り立っている。

寮長夫妻はインタビューで「一番心掛けているのは安全性、後は楽しさ。“安全に楽しく”がモットー」と話していた。寮生は寮長夫妻やレジデント・アシスタントといつでも連絡をとることができるようになっており、寮長夫妻は全般的な日常生活支援を、レジデント・アシスタントは寮内の交流促進や留学生の入退寮支援、日常生活支援、翻訳支援などを行っている。寮長夫妻によれば、「留学生が一番困ることが多いのが行政手続きや病院に行くとき。口座開設や病院はほとんどの人が苦勞する。通訳がいないと嫌がる医者も多いので、病院には基本的に（寮長夫妻のどちらかが）ついていく」。また、2019年秋学期から2020年春学期まで綱島 SST 国際学生寮で生活していた留学生の G さんは、「寮長さんや RA（レジデント・アシスタント）さんはとても親切で、機械系だけではなく書類作成や Suica の作り方、保険の手続きなども教えてくれた。特に RA さんは留学生全員を手助けしてくれたからとても感謝している。RA さんのおかげで他の日本人とコミュニケーションをとるのが簡単になった。言語と文化の橋渡し役を担ってくれた」と話している。

このように、綱島 SST 国際学生寮には安心して過ごすことのできる居住空間があり、寮長夫妻やレジデント・アシスタントのサポートによって留学生の生活上の問題の大半は相談・解決することができる。綱島 SST 国際学生寮は、矢野泉の先行研究で述べられていたエスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所の6つの条件のうち、「④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること。」（矢野 2007：171）を満たしていると考えられる。

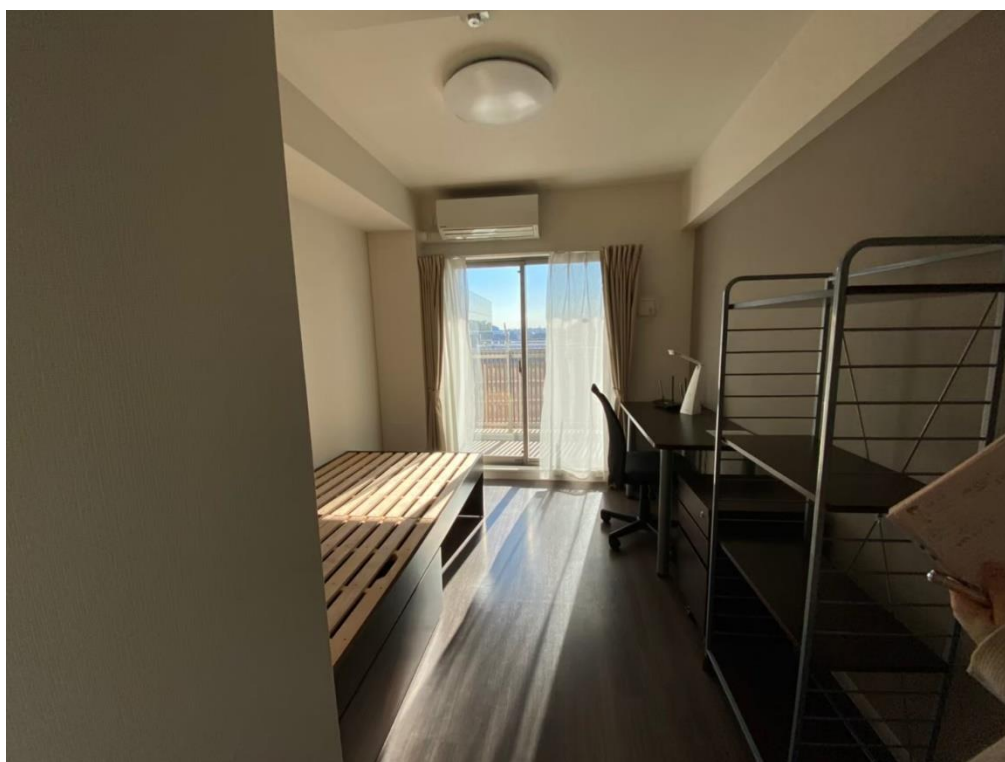


図 1 綱島 SST 国際学生寮 寮室



図 2 網島 SST 国際学生寮 2階オープンキッチン

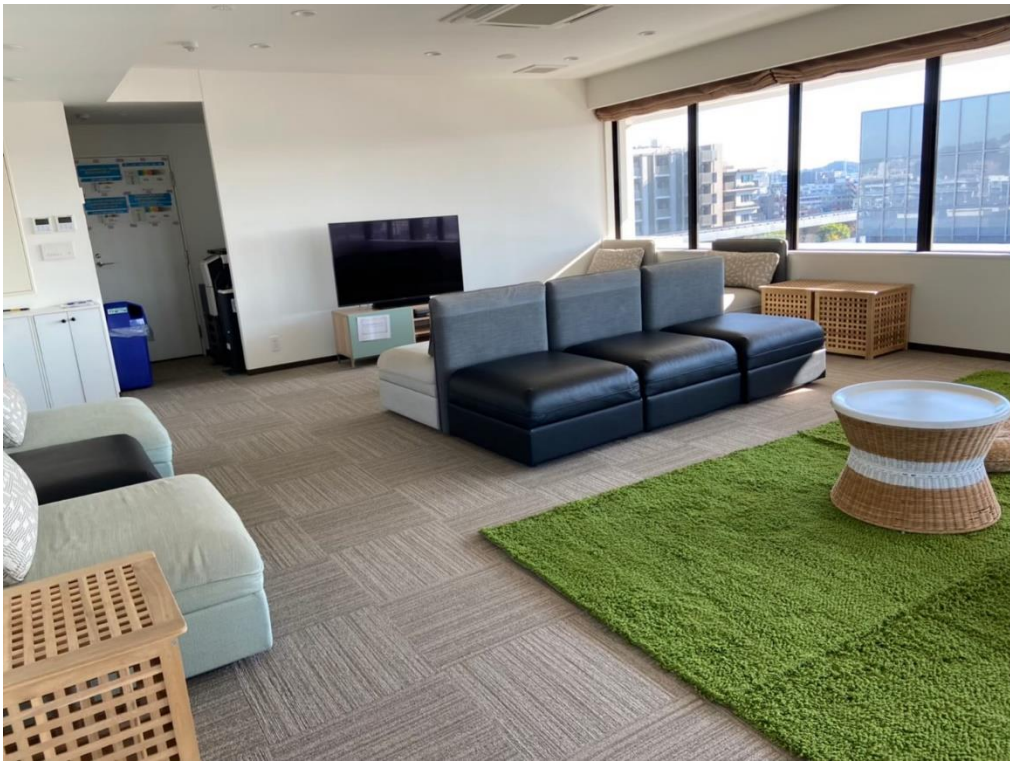


図 3 網島 SST 国際学生寮 9階ラウンジ



図 4 綱島 SST 国際学生寮 9階ラウンジ

②寮生間のつながりを促す空間

次に、綱島 SST 国際学生寮の寮生間のつながりを促す空間について考察する。①で記述したように、大きな共用スペースは2カ所ある。1カ所が2階のオープンキッチン、もう1カ所が9階のラウンジであり、それぞれに集まる寮生の層は少しずつ異なっている。留学生のGさんによれば、「日本人に限らずみんなと会話していたのは主に9階のラウンジだが、一番コミュニケーションをとりやすい場所は2階のキッチン」である。

2階のオープンキッチンは、自炊をする人が集まって一緒に料理することのできるスペースである。ダイニングテーブルやテレビがあり、食事以外の勉強や会議、オンライン授業などにも利用される。実際に、寮長夫妻への対面でのインタビューもオープンキッチンで行わせていただいた。オープンキッチンは食事の時間帯、特に夜になると人が集まり、寮生同士の交流の場となっている。料理や食事は会話のきっかけになりやすいため、寮内で最も日本人学生と留学生の交流が生まれる場所の一つである。寮長によれば、「日本人学生は留学生に比べて外国語でのコミュニケーションに対して消極的な人が多く、自ら留学生に話しかけることは少ない。留学生は社交的な人が多いが、日本人の性格を理解しているため自ら日本人学生に話しかけることは少ない」。レジデント・アシスタントは、「2階には（他の寮生と）仲良くなりたけれど勇気が出ないという人が多い」と話していた。オープンキッチンは、普段勇気の出ない寮生でも会話のきっかけを見つけてコミュニケーションをとることができるため、寮生にとって貴重な場所となっているのである。留

学生のGさんは、「(オープンキッチンでは)一緒に料理をしたり、パーティーを開催したり、ゲームをしたりしていた。『みんなが集まって楽しいからおいでよ』などと他の寮生を誘いやすかった。」「寮の良いところはたくさんパーティーがあったこと。孤独を感じた時は2階のキッチンに誰がいるか見に行き、話しかける。(母国の)スイスでは、SNSや携帯で連絡をとって、誰が何をしているか、誰が空いているのかを確認しなければならなかった。日本の国際寮ではみんなと一緒に住んでいるから、たくさんの人と関係性があり、下の階(2階)に降りるだけで誰かがいる。人に会うまでに約束する努力をしなくてもよいので、とても便利だった」と話す。しかしながら、寮生のうち自炊をするのは3割程度に留まり、7割ほどは中食や外食で済ませている。レジデント・アシスタントによれば、「(オープンキッチンで料理や食事の時間帯に交流をする)グループはほとんど固定化されてくる」。同じ時間帯に自炊をする寮生たちは固定メンバーとなるが、それ以外の寮生は自ら用途を見出して向かうこととなる。自炊をしない寮生であっても、コミュニケーションをとるために簡単に足を運ぶことのできる、Gさんのような寮生は固定メンバーに加わるが、そうでなければ難しいだろう。料理や食事は会話のきっかけとなる一方で、訪れる寮生の層を狭めてしまう可能性もある。

9階のラウンジは、オープンキッチン同様夜に利用する学生が多い。備え付けの大きなテレビで映画鑑賞やスポーツ観戦をして盛り上がったり、奥の机に寮生同士で集まって資格試験に向けた勉強をしたり、広いスペースを使ってダンスの練習やヨガをしたりと、寮生によって用途はさまざまである。広く開放的で、多様な用途を想定した造りになっており、より多くの寮生が訪れる空間となるよう工夫されていると考えられる。しかしながら、レジデント・アシスタントは、ラウンジについても「(夜の時間帯に交流をする)グループが固定化されてくる」と話す。ラウンジは主要な用途が定まっていないため、固定メンバーの構成のされ方がオープンキッチンとは異なるのではないだろうか。レジデント・アシスタントによれば、「9階に集まる寮生は活発な人が多いため、夜は賑やかな空間となることが多い」。ラウンジの固定メンバーのほとんどが、コミュニケーションをとるために簡単に足を運ぶことのできる寮生であると考えられる。多様な用途を想定した造りは訪れる寮生の層を拡大する一方で、時間帯によっては「ラウンジを訪れる=交流する」という認識が築かれ、訪れること自体のハードルが高くなってしまう可能性もある。

このように、共用スペースには工夫がされているものの、用途や使用頻度は完全に寮生個人に依存しており、また、部屋はすべて一人部屋で完全にプライベートな空間であるため、他の寮生との関わりを断って生活することも可能である。実際に、ほとんど共用スペースを利用しない寮生も存在する。レジデント・アシスタントは、「(コミュニケーションを重視して)寮生活をエンジョイする留学生と、(インフラを重視して)住まいとして利用している留学生とが半々程度」であり、「キッチンに来てくれる留学生とは仲良くなれるが、部屋にこもっていたりするとなかなか難しい」と話していた。綱島SST国際学生寮は「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を

尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること。」「⑥多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場であること。」（矢野 2007：171）について、完全に満たしているとは言えないのではないか。共用スペースは、Gさんのように自ら進んで交流する寮生にとっては「互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめる」（矢野 2007：171）空間かつ「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる」（矢野 2007：171）空間となる。反対に、あまり社会的でない寮生や交流を重視しない寮生は、入りにくい空間と認識する可能性も十分にあるだろう。そうした寮生にとって寮が「居場所」となるためには、全員の交流を促すような取り組みが必要となる。レジデント・アシスタントが企画するイベントはその一例であるが、参加は任意であり、毎回参加率は3割～5割程度となっている。干渉しない居住空間と「居場所」に必要な交流の両立が課題であると考えられる。ただし、共用スペースが寮生間のつながりを促す空間として確かに存在し、交流を促進する場所となっていることは確かである。留学生のGさんは、共用スペースについて「日本人と留学生の間にある壁を壊しやすくなってよかった」と話す。全員とは言わずとも寮生間の言語や文化の壁を壊し、「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる」（矢野 2007：171）空間として機能していることは間違いないだろう。

③おわりに

綱島 SST 国際学生寮は、プライベート空間である一人部屋と、他の寮生と交流できる共用スペースとから成り立っている。安心して生活できる居住空間があり、寮長夫妻とレジデント・アシスタントによる生活面でのサポートも充実しているため、「どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりする」（矢野 2007：171）空間であると言える。また、共用スペースは、居場所として機能するべく、寮生間の交流を促進するためにさまざまな工夫がなされている。しかし、その使い方は寮生個人に依存しており、共用スペースをほとんど利用せず他の寮生との関わりを断って生活することも可能である。「互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめる」（矢野 2007：171）空間かつ「多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる」（矢野 2007：171）空間となるかどうかは、寮生の使用頻度や社交性、寮生活に求めているものなどによって異なると考えられる。あまり社会的でない留学生や交流を重視しない留学生にとって寮が「居場所」となるためには、全員の交流を促すような取り組みが必要であり、干渉しない居住空間と「居場所」に必要な交流の両立が課題であると考えられる。

引用・参考文献

矢野泉，2007「エスニック・マイノリティの子供・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学』第9号、2007年、169-177頁

第4章 留学生を取り巻く関係性

12期 佐藤美紗希

はじめに

第3章では、場所性・空間性といった観点から、「居場所」としての国際寮についての考察を行った。続いて本章では、主に第1章第2節で整理した、「居場所」を構築するもう一つの要素として人間関係を軸に議論を行う。ある人にとっての「居場所」が成立する上では、自己と他者が双方向的に承認しあう関係性が成立していることが欠かせない。また、第1章第4節に引用した矢野恵による「居場所」の6つの条件のうち、②集団レベルの民族や生活集団から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援に繋いでもらえたりすること（矢野 2007：171）の2点は、本章のテーマである「人間関係」に大きく関わるものであるといえる。

国際寮で留学生が生活を共にし、関係性を築いているのは、寮長やレジデントアシスタント、その他多数の寮生たちである。本章では、国際寮を舞台として、これらの人々と留学生との間でどのようなコミュニケーションがとられているのか、国際寮が留学生の「居場所」として機能していく上でこれらのコミュニケーションがどのように作用しているのかについて、インタビューでの語りをもとに考えていく。考察にあたっては、国際寮において留学生が築く関係性を、その対象ごとに①寮長と留学生②レジデントアシスタントと留学生③日本人学生と留学生④留学生と留学生の四つに分けることとし、④の留学生同士の関係性についての議論のみ、インタビューを行ったGさんが滞在していた綱島 SST 国際学生寮に限定する。また、本章での議論は、留学生の生活および国際寮の環境が新型コロナウイルスによる影響を受ける前の状況を前提に行う。

第1節：寮長と留学生

寮長と留学生との日々のコミュニケーションは、短時間かつ簡潔に行われるものがほとんどだ。寮長夫妻は寮生がエントランスを出入りするときや郵便物を取りに管理人室を訪れたときなどに欠かさず挨拶をしており、そこから時おり短い言葉のやり取りが発生する。留学生にとっては、これが「行ってらっしゃい」には「行ってきます」と返す、といったような、日本での挨拶のルールを学ぶ機会にもなっているようだ。綱島 SST 国際学生寮に滞在していた留学生のGさんは滞在中に通販サイトをよく利用しており、荷物を取りに行った際に寮長のBさんと互いの故郷や留学生活について話すのはとても楽しかった、と振り返る。Bさんによると、特に用事がない時でもBさんと話をするために管理人室へ足を運んでくる寮生もおり、一部の人は帰国後も連絡を取り続けているとのことである。

ただし、基本的には寮長夫妻は寮生に深く踏み込まないスタンスをとっているようだ。日吉国際学生寮・綱島 SST 国際学生寮の双方の寮長が、寮長として一番大切にしているのは

寮生の安全を確保することであり、交流はあくまでプラスアルファの要素として捉えていると話していた。寮長夫妻は、寮の共有スペースにはまれに顔を出すものの、消防検査などの特別な用事がある時を除いて寮生の居室を訪れることはほとんど無い。一方、祖国を離れて暮らしている留学生の身に何か起きた時には、寮長が緊急連絡先となる。Bさんによると、寮生が救急搬送されるケースが年に何回か生じるが、そのような際には必ず寮長夫妻のどちらかが付き添うのだそうだ。また、留学生との直接のコミュニケーションは多くないものの、寮長夫妻は留学生が日本の生活に溶け込んでいけるよう、寮内の環境づくりの面から細かく配慮している。例えば、日吉国際学生寮の寮長のAさんは、寮内の生活ルールを徹底することによって、留学生も「郷に入っては郷に従え」と日本の文化に適応していけるよう工夫をしているとのことだ。

寮長夫妻は、国際寮で生活する留学生が頼りにできる大人として最も身近な存在だ。緊急事態が起きた時に助けを求める相手として真っ先に思い浮かぶ人がいることは、家族から遠く離れて生活する留学生にとって非常に大きな意味を持つのではないだろうか。留学生と寮長夫妻との交流は決して深くはないものの、互いの顔と名前が一致しており、見かけたら必ず挨拶しあう関係が成立していることは、寮が留学生の「居場所」となっていく上で重要な役割を果たしていると感じられる。

第2節：レジデントアシスタントと留学生

綱島 SST 国際学生寮 RA の D さんは、「留学生には黙っていても話しかけられる」と語る。留学生が日本で生活を始めるにあたり必要な書類手続きは非常に多く、「銀行口座を開設したい」「携帯を契約したい」「保険に登録したい」など、助けを求められる場面は様々だ。留学生の G さんも、日常生活での困り事を解消したり、他の日本人学生との接点を持った際には、D さんら RA のサポートが非常に力になったと振り返る。

レジデントアシスタントが主に取り組むことの1つが、月に1度の寮内の交流イベントの企画である。RAによる交流企画の主な目的は、特に日本人学生と留学生との間の交流を促進することだ。インタビューをした2名のRAは、寮内での日本人学生と留学生との間のコミュニケーションはあまり活発でないと感じており、ウェルカムパーティーやクリスマスパーティーなどの企画を通じて、普段あまり関わらないグループ同士の関わりを生み出そうと試みている。また、RAによる寮内の交流活性化に向けた取り組みはこれらの交流企画に限らず、日常の習慣の中でも行われている。例えば、日吉国際学生寮RAのCさんは、寮内の共用キッチンを1つの集会所のような役割にし、グループに関わらずみんなで集まって話す場所として活用していく取り組みを行ったそうだ。留学生と日本人学生との交流が深まらない大きな要因の1つとして、日本人学生が英会話に苦手意識を抱いていることがある。このことを踏まえ、Cさんは言語をあまり必要としないボードゲームを用意するなどして工夫をした。また綱島 SST 国際学生寮 RA の D さんは、自らが日本人学生と留学生を繋ぐ存在となれるよう、何かと関わる機会の多い留学生だけでなく、日本人学生とも意識

的にコミュニケーションを取るようになっているようだ。

入寮時のほぼ一対一でのオリエンテーションから留学生のサポートにあたる RA は、ほとんどの場合において、留学生が日本で互いに顔と名前を認識しあう一番最初の相手となる。彼らは留学生にとって一番身近な日本人学生であり、留学生が他の日本人とコミュニケーションを取る際の仲介役にもなる。留学生活における困り事を解消すると同時に、他の日本人学生との接点を生み出す RA は、留学生が国際寮での生活、さらには日本での留学生活に入り込んでいくにあたっての入り口としての役割を果たしているといえる。

第3節：日本人学生と留学生

国際交流を目的に設立されてはいるものの、国際寮の中で留学生と日本人学生との交流はあまり行われていないのが現実のようだ。今回インタビューを行った寮長や RA 全員が、日本人学生にとっては寮は数あるネットワークのうちの一つにすぎず、寮内で留学生と交流しているのは一部のかなり活発な人に限られると回答している。国際寮での日常の中で、寮内の共用スペースに日本人学生と留学生が同時に存在することはあるものの、ゲームをしている日本人学生の集団と映画を観ている留学生の集団とでバラバラな過ごし方をしているようなことも少なくない。実際、留学生の G さんも日本人学生とはほんの一部としか話さなかった。RA を通じて日本人学生との接触機会を持つことは簡単だったが、大多数の日本人学生は留学生の共通語である英語を話すことができないため、RA のサポートがない状態で彼らとコミュニケーションを取るのは非常に難しかったようだ。日本人学生と留学生との交流が深まらない別の要因として、寮長や RA は日本人学生と留学生との間の年齢的なギャップの問題も挙げる。日本人学生のほとんどは学部生である一方で留学生には修士生も多く、互いの雰囲気の違いなどが話しにくさに繋がっていると感じるようだ。

しかしながら、日本人学生も留学生も、互いへの関心を持っていないわけではない。綱島 SST 国際学生寮 RA の D さんは、寮内の日本人学生の中には、単に勇気が出ないだけで、留学生との交流に対する関心は持っている学生も一定数存在すると感じている。一方の留学生の側も、特に滞在期間が長い場合は日本人学生ともしっかり交流したいと考える人が増えてくるようだ。今回インタビューした留学生の G さんは、「日本の文化に深く入り込み、日本の学生ともしっかり関わりを持ちたい」という思いから留学中の滞在先として国際寮を選択しており、学外も含め日本人との交流を深めたいという思いがありながらも、実際にはなかなか接点を持つことができなかったことにつらさを感じたと話している。

大学のキャンパスでは、国際寮の中以上に日本人学生と留学生との接点は少ない。G さんが選択していた慶應インターナショナルプログラムの大部分を占めるのは日本語の授業だが、そこには当然日本人学生はいない。また、日本語以外の授業も英語で実施されるものであるため、完璧に英語を話すことができる一握りの日本人学生しか履修していなかったようだ。キャンパスにおけるこのような日本人学生と留学生との接点の少なさを、綱島 SST 国際学生寮 RA の D さんは「結界」と表現する。日本人学生としてのオーソドックスな学

生生活の中で、留学生はその存在自体があまり見えてこないのが現実だ。この状況に対し、Gさんのように疎外感を感じる留学生も多いだろう。このことを踏まえると、日本人学生と留学生が日々間近で生活する国際寮の環境は非常に特殊であるといえる一方、その国際寮においても日本人学生と留学生との間には一定の「結界」が生じている。しかしながら、日本人学生は国際寮の寮生のうち半分を占める大きな存在だ。国際寮の「居場所」としての機能を高めていくためには、留学生と日本人学生との関係性をより深めていくことが課題となるだろう。

第4節：留学生と留学生

国際寮における留学生同士の関係性は、日本での留學生活のスタートラインになるものとして非常に良いものになっている。綱島 SST 国際学生寮では留学生同士の交流が活発に行われており、留学生の G さんの場合は留學中の人間関係の 7 割が国際寮繋がりのものであったそうだ。寮長の B さんや RA の D さんによると、留学生の中には来日前から大使館や以前日本に留學していた先輩などを介した一定のコミュニティを持っている人もおり、寮で出会った友人と互いにコミュニティを紹介しあうことで少しずつ関係性を広げていっているようだ。綱島 SST 国際学生寮では RA が企画する公式のイベント以外にも仲の良い数人のグループが開催するプライベートなパーティーがほぼ毎日行われており、G さんも学期中には週に 2 回以上何らかのパーティーに参加していた。この寮ではアルコールの持ち込みも許可されており、G さんは夜に一緒にお酒を飲み交わすことが周りの寮生と仲を深めていく上で一番良い方法だったと感じている。留學生活中に孤立感を感じたときも、これらのパーティーに参加したり、2 階のキッチンに降りて行って他の留学生とじっくり話すことで、人とのつながりを感じて元気を出すことができた。

G さんはまた、様々なバックグラウンドを持つ人と共同生活を送ったことも非常に良い経験になったと感じている。各自の洗濯のタイミングなど、日常生活の中で多くの事を他の寮生と相談することを通じて、互いの違いに対する理解を深めることができたそうだ。教養キッチンで他の留学生が作っている見知らぬ料理を見ることも彼女の楽しみの一つになっていた。

綱島 SST 国際学生寮における留学生同士の関係性は、日本滞在中の人間関係の基盤になるものとして、留学生にとって非常に大きな意味を持っているようである。

おわりに

国際寮で留学生を取り巻く関係性は、「居場所」を構成する上で必要な要件をおおむね満たすものである一方、課題も残している。寮長や RA は、それぞれ立場の違いはあるものの、留学生が何か困り事があった際にすぐに頼れる存在となるべく、留学生と顔と名前を一致させあつたうえで日常的にコミュニケーションを取っている。以上の事から、寮長・RA と留学生との関係性においては、相互承認が成立していると同時に、矢野が提示した④「どの

ような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援に繋いでもらえたりする（矢野 2007：171）」という条件が満たされているといえる。また、国際寮における留学生同士の関係性においても強力な相互承認がみられ、日本滞在中の人間関係の軸になると共に、異なる文化的背景を持つ人々との共同生活を送る中で②「集団レベルの民族や生活集団から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しむ（矢野 2007:171）」ようなものになっていることが伺える。

その反面、留学生と日本人学生との間には一定の距離感が残されている。日本人学生は寮生のうち半分を占める非常に大きな存在であるにも関わらず、留学生が彼らと関わりを持つことはほとんどない。このような現状において、留学生と日本人学生との間に相互承認が成立しているとは言い難いだろう。Gさんも、留学中に日本人と接点を持つことが非常に困難であったところに孤立感を感じており、日本人学生と留学生との関係性には改善の余地があることが分かる。

以上の事から、留学生が国際寮に対して自分の「居場所」としての認識を持てるような人間関係を構築するには、日本人学生と留学生との関係性をより深めていくことが必要だ。国際寮を構成する寮長夫妻、RA、日本人学生、留学生の4者すべてとの相互承認が実現してこそ、国際寮は留学生にとって「『ここは私の場所だ』『私はここに居てもいいんだ』という安心感を持てる場所」（藤谷 2015:77）になるのではないだろうか。このことを踏まえると、RAによる日本人学生と留学生との間の交流促進の取り組みは非常に重要なものであると感じられ、彼らの活躍に引き続き期待したいと思う。

引用・参考文献

- 藤谷秀、2015「<居場所>と社会で生きる権利」『総合人間学』第9号、2015年、75-83頁
矢野泉、2007「エスニック・マイノリティの子供・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ、教育科学』第9号、2007年、169-177頁

第5章 留学生とコロナ禍

12期 渡辺春乃

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年12月初旬に、中国の武漢市で第1例目の感染者が報告されてから、わずか数カ月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった。日本においては、2020年1月15日に最初の感染者が確認された後、現在、173万人以上の感染が確認されている（国立感染症研究所2020：14）。

このパンデミックは、海外留学を望む学生に大きな影響を与えた。日本学生支援機構は、2020年5月1日時点で日本の大学や日本語学校などに在籍する外国人留学生在が27万9,597人で、前年から1割減ったと発表した。文部科学省などによると、新型コロナウイルスの影響で来日できず、海外からオンラインなどで授業を受けた学生2万人程度も集計に含んでいるという（日本学生支援機構2021：1-2）。私たちが訪問した2つの学生寮も新型コロナウイルスの影響を受けている。綱島 SST 国際学生寮は、例年、約80人の留学生を受け入れるとしているが、現在寮で生活している留学生は15人で、例年の2割程度となっている。日吉国際学生寮でも、留学生は4、5人しかいない状況である。これを踏まえて、「新型コロナウイルス感染症の流行により国際寮の価値や重要性に変化はあったのか」について考えていく。

第1節：エスニック・マイノリティの居場所としての国際寮

本節では、矢野泉による先行研究を取り上げる。日本人の若者をマジョリティ、外国人の若者をマイノリティだとすると、日本人の若者が多く集まる居場所では、マジョリティとマイノリティとの間は、目に見えない透明のガラスのような壁で仕切られ、マイノリティは周辺においやられているのではないかと矢野は指摘する。マイノリティにはマイノリティが主役として安心して自身の存在確認をしながら成長できる居場所が必要であり、そうした居場所は、見えないガラスの壁で仕切られるような息苦しい場所ではなく、マイノリティ自身が感じる解放感に溢れた場所にしかつけれない（矢野2007：23）。この「目に見えない透明のガラスのような壁」について、綱島 SST 国際学生寮のレジデント・アシスタントである D さんからも似たような言葉を聞いた。彼女は「寮の内外で結界の存在を感じる」と言う。日本は、ホスピタリティはあるが、外国人を目の前にすると距離を置いてしまう。キャンパスにおいても同じような現象が起きている。日本人と留学生の接点がないことが「寮の内外で結界の存在を感じる」原因の一つだと感じている。この「結界」については、新型コロナウイルス感染症が流行する前から彼女が感じていたことだ。しかし、流行後は、日本人や留学生関係なく、キャンパス内での学生同士の関わりが少なくなった。このことから、共有スペースなどで様々な文化を持つ同年代の若者と関わることのできる国際寮は、コ

ロナ禍でさらに貴重な場になったと考えられる。

また、第1章で述べたように、矢野はエスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所の条件を6つあげている。第1章において、6つの中で、「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること」や「④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること」は居場所形成における基本的な姿勢であり、⑥にある「多文化を利する」といった内容は国際寮が多文化性を活かした居場所づくりを行う上で大切にしなければならない条件としている。「④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること」について、行政や医療の面での手続きや通訳・翻訳支援など、寮長ご夫妻やレジデント・アシスタントの役割は、コロナウイルス関係なく、これに当てはまる。この寮長ご夫妻やレジデント・アシスタントの役割自体に新型コロナウイルス感染症の流行によって大きな変化があったわけではないが、前述したように、コロナウイルス感染拡大によって、学生寮に入寮する留学生の数が減り、レジデント・アシスタントと関わる留学生の数が少なくなった。このことにより、留学生ひとりひとりと親密に関われるようになったという。留学生の人数が減ったことで、覚えやすくなり、ひとりひとりを捉えやすくなった。また、寮生が外出を控えるようになったことも、深くコミュニケーションを取るきっかけとなった。コロナウイルス感染拡大により、直接外部と関わるのが難しくなった今、「どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりする」存在が近くにいることは、留学生にとって非常に価値のある空間だといえる。

「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること」については、新型コロナウイルス感染症の流行により、キャンパス内での交流が非常に少なくなった。慶應義塾大学での2020年度の授業形態は、オンライン授業を基本とし、一部の授業をオンキャンパス（対面）で実施していた。2021年度もオンライン授業は継続されている。このことによる交流の減少により、学生同士で「互いの差異や間」を知ったり尊重したりできるほど親密な距離になるということが非常に困難になったと考えられる。そのような状況の中で、学生寮内では、寮生同士と一緒に料理をしたり勉強を教え合ったりしている。このような関わりが、「互いの差異や間を尊重する」ことにつながり、寮生は「過度に親密な距離感を柔軟に楽しんでいる」といえる。また、学生寮内での共有スペースは、日本人も留学生も集まり複数の文化が存在する場となっている。お互いの食文化について学んだりお互いの得意教科を教え合ったりすることができる学生寮の共有スペースは、⑥にある「多文化を利する」ことができる空間だといえる。通常であれば、授業が行われているキャンパス内の教室も「多文化を利する」空間になり得るのかもしれないが、新型コロナウイルス感染症の流行により、対面でのそのような空間の形成を難しくなった。このことを踏まえると、コロナウイルス感染拡大により、国際寮の居場所としての価値が高くなったといえる。これまで述べてきたのは日常的な共有スペースの使い方についてだが、国際寮内では様々なイベントが行われている。「パーソ

ナルスペースだけあればいい」というスタンスの留学生もいるが、そのような留学生の「孤立化」を防ぐために、Welcome Party や餅つきなどの国際寮内でのイベントや企画が必要になってくる。このようなイベントの企画はレジデント・アシスタントが担当する。昨年は、コロナ禍でイベントの開催が難しくなっていたが、最近では様々なイベントを開催できるようになった。対面授業も限られ、学園祭も制限がある中で開催されたコロナ禍で、複数人で集まっての交流ができる国際寮は、「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること」、「⑥多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場であること」において非常に価値のある空間になったといえる。

第2節：自己存在感を与える場としての国際寮

次に、萩原健次郎の先行研究を取り上げる。萩原が居場所についてまとめた中に以下の項目がある。

- ①居場所は「自分」という存在感とともにある。
- ②居場所は自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる（萩原 2001：63）。

この居場所の定義について、国際寮で寮長・寮母ご夫妻が心がけていたことにつながる。彼らは、共有スペースに顔を出したり、荷物を取りにフロントへ来たときや国際寮内ですれ違った際に声を掛けて話したりしている。このような些細なコミュニケーションが、留学生が「自分」という存在感を持つことにつながる。さらに、綱島 SST 国際学生寮の寮長ご夫妻 B さんは、留学生とのコミュニケーションの中で、寮を出て行く際の「行ってらっしゃい」と「行ってきます」、戻ってきた際の「おかえりなさい」と「ただいま」などの基本的な挨拶を心掛けている。「行ってらっしゃい」のあいさつの文化がない欧米の学生は、はじめ何を言われているのか理解できない。そこで「『行ってきます』、と返せばいいんだよ」と教えて、コミュニケーションを図っている。また、基本的なあいさつをするときに、必ず「〇〇さん、こんにちは」「〇〇さん、行ってらっしゃい」のように名前を付け加えるようにしている。コロナ禍でキャンパス内でのコミュニケーションが最小限になってしまった中で、このように自分の名前を呼んでもらえるコミュニケーションは、「自分という存在感」の認識につながると考える。留学生側からも旅行のお土産渡してくれたり、旅行の思い出を報告しにフロントに来てくれたりするということがあったので、「自分と他者との相互承認」も国際寮内で成立しているといえる。その他にも、B さんや D さんは、帰国した留学生と今でも LINE 等で連絡を取っている。お互いの国で何かあった時に連絡したり、就職したときに向うから教えてくれたりしている。「自分という存在感」や「自分と他者との相互承認」として、帰国後も国際寮が居場所として機能しているといえる。

おわりに

「新型コロナウイルス感染症の流行により国際寮の価値や重要性に変化はあったのか」という本章の問いについて、結論として、国際寮の居場所としての価値は失われておらず、むしろコロナ禍で人との身体的な交流が減ったからこそ、国際寮内での寮長・寮母ご夫妻やレジデント・アシスタントとのコミュニケーションが非常に価値のあるものになったといえる。世の中のコミュニケーションが最小限になり、他者にとっての自分の存在意義を感じる事が難しくなった今、複数人で協力したり世間話ができたりする相手が近くに存在する国際寮は非常に価値の高い空間といえる。また、外部との関わりが減ってしまったことで必要な支援につないでくれる存在が近くにいるという点でも、国際寮の存在の重要性が増したと考えられる。コロナ禍を経て、国際寮内でのコミュニケーションの「人間関係」の面での居場所としての価値を高めたと考える。次章では、国際寮で生活する留学生本人の視点から国際寮という居場所について考察していく。

引用・参考文献

国立感染症研究所、2020『病原微生物検出情報 Vol.41 No.8』

日本学生支援機構、2021『2020（令和2）年度外国人留学生在籍状況調査結果』

矢野泉、2007「マイノリティの居場所が創る生涯学習」『多文化共生と生涯学習』、明石書店、2007年、15-86頁

萩原健次郎、2001「子ども・若者の居場所の条件」『子ども・若者の居場所の構想』、学陽書房、2001年、51-65頁

第6章 留学生からみた「居場所」としての国際寮

13期 神谷莉乃

はじめに

本章では、2019年の秋学期から2020年の春学期の間、綱島 SST 国際学生寮に滞在していた留学生を対象として実施したインタビュー調査の結果を分析し、留学生の視点から日本における「居場所」としての国際寮の機能を評価していく。その際、「居場所」としての国際寮を「場所」と「人間関係」の両面から考察し、今後の課題について言及する。

第1節：留学生について

本共同研究で実施したインタビュー調査の対象となった留学生（以下、Gさん）は、スイスにある大学から交換留学によって慶應義塾大学に在籍していた。現在はスイスで引き続き大学生を送っている。本インタビュー調査の参加者はGさんの他に、当時から現在も引き続き綱島 SST 国際学生寮でレジデントアシスタントとして活動しているDさん、そして塩原研究会から私自身を含めた2名のゼミ生の計4人でZoomアプリを通してオンライン上でインタビューを行った。

Gさんは、慶應義塾大学の交換留学プログラム以前に日本に留学していた経験がある。幼少期にブラジルに住んでいた頃日本のポップカルチャーに触れてとても興味が湧き、高校を卒業したタイミングで、どこか遠くの場所で文化が異なる新しい世界を知りたいという思いから家族や友達をおいて一人で神戸へ留学に行った。当時Gさんは、日本語を一言も話せなかったそうだが、日本語の「～は～をします」という文の構造が単純で理解しやすく、日常的に使う単語を覚えれば、3ヶ月間の滞在期間でホストファミリーの老夫婦とも日常会話が徐々にできるようになっていったと言う。日本の食文化はもともと好きだったそうだが、この神戸での留学経験で日本の文化もとても気に入ったため、スイスへ帰国した後もまた日本に住みたいと思うようになったそうだ。また、大学生になってまた日本へ留学に来た理由として、困っている人を快く手助けするという精神と国の安全性が、当時Gさんが住んでいたスイスの文化と国柄に似ているからだと話してくれた。

第2節：居住「場所」としての国際寮

以前にも日本へ留学に来た経験があるGさんでさえ、居住場所としての見知らぬ土地で部屋を探すのは難しく、どのようにすれば良いかわからなかったそうだ。しかしGさんが国際寮を居住場所として選んだ理由は、スイスの大学から日本へ既に留学へ行った友達から、「日本人のコミュニティに入って日本人と関わり、日本語を学びたいのであれば国際寮を選ぶのがベストだよ」と教えてもらったことから、日本人と一緒に暮らしている国際寮を選んだと言う。居住場所としての国際寮は、建物自体建設仕立てで新しく、すぐ隣にスーパ

ーやショッピングセンターが入っている大きな商業施設がありとても便利だったと話した。

ただ、綱島 SST 国際学生寮のルールとして男女でフロアが分けられていて男女間でフロアの移動が禁じられていたことに初めは驚いたと言う。日本で新しくできた異性の友達を部屋に呼んで一緒に映画を観ることなどが出来なかったことは悲しかったが、ルールであることを理解していたと話した。また、G さん自身これまで洗濯をする習慣がなかったことや、スイスとは違うタイプの洗濯機だったことから、洗濯が個人的に大変だったと言う。しかし、G さんは入寮した日に寮長さんから使い方を丁寧に説明されたということをして話してくれた。洗濯機などの機械類だけでなく、交通系 IC カード作成など生活に必要なものや書類作成など様々なことをサポートしてくれて、とても役に立ち、レジデントアシスタントを含めて感謝していると話した。

さらに、G さんは国際寮という居住空間で共同生活するというのは、単に完全に知らない人同士と一緒に住むということではなく、お互いがそれぞれの文化を理解しようとしなくては対立してしまうかもしれないという状況での共同生活であるからより一層難しいと感じていた一方で、G さん自身は異文化交流に関心が高くむしろ異文化を知ることが楽しいと感じていた。外国人留学生はそれぞれの国から日本へ留学に来ており、そこに住む日本人学生も国際寮を自主的に選んでいる人が多いと考えられることから、少なくとも国際寮に住む学生たちは異文化に対してそこまで抵抗感を感じていないと考えられる。しかし異文化間での衝突が起こるとまではいかないが、知らないと受け付けられないような異文化に対して、理解を示すよう心掛けることは大切であると学んだ。

第3節：「人間関係」をつくる場としての国際寮

第4章でも記述したように、G さんにとって綱島 SST 国際学生寮は「人間関係」の面において大きな割合を占めていた。G さんは慶應義塾大学国際センターが管理している Keio International Program に参加しておりすべて英語で行われる授業なので、キャンパスでは日本人学生と関わる機会が少なかったと話した。また G さんは、留学生の立場として大学以外で新しく日本人と繋がることは難しいことだと考え、G さんのように元から知り合いの友達がいないうえに、大学外での新しく人に出会う機会はほぼないと話した。自ら積極的に行動し、果敢に日本人に関わろうとしない限り大学外で新しい人と出会い、友達になれる可能性はすごく低いと言う。さらに、このような状況は日本の環境が問題なのではなく、スイスでも同じような事が起こると言う話を続けた。もし留学生、または外国人に声を掛けられたらほとんどの日本人は話すことを受け入れ、もしかすると友達にまで発展する可能性もあると考えるが、街中で外国人だからと言う理由だけで日本人から話しかけようとは誰もしないだろうと話した。少なくとも G さんはこのように留学生としての立場を日本人側の視点からも考えた上で、留学生側からアプローチしないと繋がりは作れないと理解していると感じた。

このように大学でも大学外でも日本人と関わる機会が少なかったという G さんの経験を

踏まえると、改めて国際寮は留学生にとって「人間関係」をつくる場として大きな役割を担っていると考えられる。Gさん自身、留学中の9割の交友関係は綱島 SST 国際学生寮で築いたと語っていた。寮生活について、日本人と留学生が混ざって暮らしている環境にとっても満足していると感じていて、日本人との関わりに関してはレジデントアシスタントのおかげで交流関係を広める事ができたと話した。Gさんは大学で言語の授業を通して日本語を学んでいたが、法や経済を主に勉強している留学生からするとレジデントアシスタントが「言語と文化の架け橋」となって日本人と関わるきっかけを作ってくれていたと言う。

第3章、および第4章でも述べてあるように、綱島 SST 国際学生寮では新型コロナウイルスが流行する前は月に一回の頻度で交流イベントをレジデントアシスタントが主催しており、留学生と日本人が集まる場を設けることで寮内での国際交流を活性化させていた。そこには留学生の結構な割合が参加してくれていたと Dさんは振り返る。またそのような交流を目的とした公式なパーティーとは別に、少人数でのパーティーはほぼ毎日のように頻繁に行われていたと語る。そのようなパーティーは綱島国際学生寮の2階にあるオープンキッチンで開かれており、普段も一緒に料理をしたり、ゲームをしたりと日本人と留学生の間にある壁が主にキッチンという「場」で壊されていったと考えられる。「みんなが集まって楽しいからおいでよ」と部屋にいる寮生を誘いやすかったというエピソードからは、オープンキッチンが「交流する場」として機能していると考えられる。

国際寮には、日本語が全く話せない留学生、英語が全く話せない日本人学生、日本語を少し話せる留学生、英語が堪能な日本人学生など住んでいる人は様々である。Gさんは日本語を少し話せる留学生という立場として、留学生、そして日本人との関わり方を分けていた。

「Yes」や「No」を日本語で話せない留学生の友達には、「何か助けが必要だったら言ってね」と伝えたそう。そして英語を勉強したいと言う日本人学生に対しては英語と会話をし、日本人学生の英語力の向上に快く協力したと語る。その理由として、Gさん自身英語で会話する方が楽だからということに加え、日本語を全く話せない留学生がコミュニティから外れるような感覚にさせないようにするためだと話した。つまり、レジデントアシスタントが担う役割を Gさんは自発的に考え行動して、寮内の「人間関係」の構築に携わっていたと考えることができる。

第4節：「居場所」としての国際寮

第1章でも述べたように、「居場所」とは「人と人が互いの可変性や相違点を認め関わり合い、安心して過ごすことができる空間」である。また、留学生にとって国際寮が「居場所」となる条件として、矢野泉の先行研究が示した6つの条件を保持することが必要であると考えた。

そのうちの「④どのような問題でも相談でき、指示を得られたり、必要な支援につないでもらえたりすること」(矢野 2007 : 171) という条件に対して、第3章、および第4章で述べたように寮長夫妻やレジデントアシスタントが「留学生が何か困り事があった際にすぐ

に頼れる存在」(第4章)としての役割を担っていることがインタビュー調査を通して分析することができ、さらに国際寮への訪問とインタビュー調査の結果の分析を通して、綱島 SST 国際学生寮と日吉国際学生寮は「安心して生活できる居住空間」(第3章)であることから、この条件を満たしていると考えた。これに加えて留学生へのインタビュー調査から、留学生自身が他の留学生にとって「頼れる存在」になる場合もあることがわかった。寮長やレジデントアシスタントといった役職に就いていなくても、他の人にとっての支えになり得るとするのは共同生活で毎日頃人と会うことが可能な寮ならではであると考えられる。また、Gさんが孤独感を感じた際にとる行動として、2階のオープンキッチンへ顔を出して誰かいないか確認しに行き、もし誰かがいたら声を掛けて他愛もない話から深い話まで話すと語っていた。スイスでは SNS を通して空いている人を探さないといけなかったが、寮生活だとそのようなことがなくとても便利だったと話した。メンタル面において寂しさや孤独さを感じた時も、共有スペースがあることですぐに誰かに支えてもらえる環境があるという点においても条件を満たしていると考えた。

そして「②集団レベルの民族や生活習慣から個人レベルの個性に至るまで、互いの差異や間を尊重し、過度に親密な距離感を柔軟に楽しめること」(矢野 2007:171)については、国際寮内にある共有スペースをどのように利用するかによって個人差があると述べた(第3章)。本共同研究においてインタビュー調査を実施した留学生 Gさんは、寮内で積極的に「人間関係」を築こうと動いていたことから、この条件を満たしているように考えられる。しかし、留学生の中には交流イベントやコミュニティ形成に消極的な人がいるのも否定はできない。

特に国際寮が多文化を重視した居場所づくりで大切にすべきである「⑥多文化を利した複合的なアイデンティティ形成ができる場であること」という条件に対して、綱島 SST 国際学生寮の「男女間でフロアの移動禁止」というルールがつけられた背景が日本固有の文化に基づいているものなのか、または多文化的であるかどうかは議論の余地があるだろう。しかし、この寮則は国際寮という「場所」が寮生にとって安全で安心して生活する居住空間のためであることを忘れてはならない。その上で留学生は理解を示して寮生活を送っていたことから、この寮則は⑥の条件を完全に阻害しているわけではないと考える。しかし、Gさんが考えるように留学生側の行動がない限りは⑥の条件を満たすことが難しい。つまり、②の条件と同様に、積極的に交流を図る人とそうでない人では「複合的なアイデンティティ形成ができる」かどうかには個人差ができてしまうと考える。

おわりに

以上を踏まえて、国際寮は留学生にとって「場所」と「人間関係」の両面から「居場所」となり得る環境であると結論づける。しかし、国際寮に限らず「居場所」を感じるためには行動や気持ちなど個人に委ねる部分が多いように感じた。

今後の課題として、国際寮が留学生にとっての「居場所」となるためには、矢野が先行研

究で示した 6 つの条件をバランスよく組み合わせて両立させることが挙げられる。また、本共同研究において留学生へのインタビュー調査が、綱島 SST 国際学生寮に住んでいた留学生 1 名のみしか実施することができなかったことから、偏った結果になってしまっている可能性がある。日吉国際学生寮に住んでいた留学生や日本語が全く話せなかった留学生を対象とした場合、どのような結果になったのかまだ考察の余地があると考えられる。しかし留学生の G さんのご厚意と協力のもと、留学生が国際寮を「居場所」として感じているのかについて細かく分析することができた。

引用・参考文献

矢野泉, 2007 「エスニック・マイノリティの子供・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学』第 9 号、2007 年、169-177 頁

結論

国際寮が留学生の生活を支える「居場所」としてどのように機能しているのか、またどのような可能性や課題点を抱えているかという問いを探索するために、筆者らは序論にて3つのリサーチクエスチョンを立てた。先行研究の検討、現状分析、日吉国際学生寮と綱島 SST 国際学生寮関係者へのインタビュー調査を通じて得た知見を持って、その RQ 一つ一つに答えていく。

第一に、RQ1（留学生にとっての「居場所」を作る上で工夫されていることは何か？）に対して、「場所」と「人間関係」という2つの観点から考察した。まず「場所」に関して、国家による留学生の受け入れに際して生活面・金銭面でのより充実した個別的なサポートを民間レベルの組織との連携を図りながら確立させていく必要性が挙げられたものの、日吉・綱島の両学生寮においては細やかな配慮の下に成り立ったサポート体制が敷かれていることが分かった。両施設にはプライベートな空間と共用スペースの双方が備わっており、「居場所」のコミュニティ形成としての側面と、社会からの逃避が可能といった側面の双方を満たす空間設計となっていた。尚、共用スペースにも用途が決まっている空間とそうでない空間が存在しており、学生間の多様な交流の在り方を可能とする作りになっていた。また留学生が抱える「人間関係」について、彼らは寮長夫妻・レジデントアシスタント・他の留学生との強力な相互承認に基づく関係性を築いていた。具体的には、寮長は緊急時に頼れる存在として、RA は各種手続きの際のサポート役や日本人学生との仲介役として、他の留学生は近しく親密な人間関係の基盤としてなどと、寮関係者のそれぞれが分業的に「居場所づくり」を支えていることが分かった。

第二に、RQ2（コロナ禍で「居場所」としてどのような変化があったか？）についてのインタビュー調査の結果、コロナ禍において国際寮の居場所としての価値は高まったという結論にたどり着いた。その理由として、社会全体で身体的な交流が減少した結果、「互いの差異や間を尊重する」体験の希少性が高まったことが挙げられる。また留学生が感染症などの危機に見舞われた際に、自分の存在を認めてくれている相手が守ってくれるという安心感を彼らが持てることも、国際寮が居場所として機能してきたおかげである。さらに、国際寮内の留学生の人数が減ったことや学生が外出をする時間が少なくなったことで、学生同士がより深く関わり合える機会が創出された。つまりコロナ禍を通じて国際寮の社会的な価値が高まっただけではなく、居場所としての「質」も高まったのである。

第三に、RQ3（「居場所」になる上でどのような課題を残しているのか？）についての考察を踏まえた結果、主に二つの課題点が挙げられると考える。まず一つ目は、留学生の日本人学生との交流の少なさだ。留学生は多くの寮関係者に支えられて居場所を保持しているものの、寮内の大多数を占める日本人学生との接点を十分に持てていない。日本人学生との交流を促進させることができれば、彼らが寮の外部に持つ広範な人的ネットワーク

に繋がる可能性が増え、留学生が接点を持つことが出来るコミュニティも多様化すると考
える。しかし「結界」と表現されるように、現状留学生は大学キャンパス内においても日
本人学生と交流する機会が少ない。そのような環境が日本人学生の中で留学生と触れ合う
ことへの抵抗感をもたらしているのだとしたら、この課題は国際寮だけの問題ではなく、
教育機関全体の課題として捉えるべきではないだろうか。二つ目の課題として、干渉と交
流の線引きをいかに設定するかといった問題が挙げられる。前述したように、居場所は他
者との交流を基礎としていると同時に、あくまでもそれは自発的なものであり、交流する
ことを強制されるような場所であってはならない。留学生と日本人の交流促進を目指す上
でも、あまり交流を重視しない学生の存在を常に意識することが不可欠であり、両学生寮
の寮長夫妻もそれを考慮して深く踏み込みすぎない干渉の在り方を心がけていた。この議
論は国際寮のみならず、「居場所」論全体に対して指摘できるだろう。「居場所づくり」に
おける干渉と交流の線引きは難しく正解が恐らくない故、常に意識し続けなければなら
ない問題である。

謝辞

本共同報告書の執筆にあたり、多くの方々にご協力いただきました。指導教官の塩原良
和教授からは多大なご指導を賜り感謝の念に堪えません。日吉国際寮及び綱島 SST 国際寮
の寮長ご夫妻、西松地所株式会社の I 様、インタビュー調査にご協力くださいましたレジ
デントアシスタント及び寮生の皆様、実名は控えさせていただきますが、沢山の貴重なお
話をお聞かせ賜ったこと厚く御礼を申し上げ、感謝する次第です。